



- 開催日／2010年10月17日(日) 10:00～16:00
- 会場／サッポロファクトリー(アトリウム・ファクトリールーム)
札幌市中央区北2条東4丁目

主 催：環境省北海道地方環境事務所
共催・後援：経済産業省北海道経済産業局/農林水産省北海道農政事務所/北海道/札幌市
協 力：3R活動推進フォーラム

開催概要	1
講演会進行プログラム	3
御挨拶	4
平成22年度北海道ゼロ・エミ大賞	5
講演・トーク①② ～マイボトル・マイカップが使いやすい社会づくり～	
3Rトーク	7
「マイボトル・マイカップからはじめるエコ入門」 講師：環境コンサルタント・エコライフスタイルアドバイザー ペオ・エクベリ氏	
事例発表①	11
「マイカップから始まった社内の環境への取り組み」 講師：パタゴニア日本支社 環境担当 篠 健司氏	
事例発表②	14
「なかしべつ330° 開陽台マラソンが取り組んだマイカップ運動」 講師：なかしべつ330° 開陽台マラソン実行委員会事務局 蟻戸 昭智氏・牧野 司氏	
トークセッション	19
「マイボトル・マイカップが使いやすい社会づくり」 コーディネーター （有）ボイスオブサッポロ 代表取締役 橋本 登代子氏 パネラー ペオ・エクベリ氏（環境コンサルタント・エコライフスタイルアドバイザー） 篠 健司氏（パタゴニア日本支社 環境担当） 蟻戸昭智氏（なかしべつ330° 開陽台マラソン実行委員会事務局） 牧野 司氏（なかしべつ330° 開陽台マラソン実行委員会事務局）	
事例発表③	24
「北海道エネルギーのECOチャレンジ～マイボトル・プロジェクト～」 講師：北海道エネルギー(株) 総合企画本部 業務部 部長 菊地 健二氏・環境企画課 竹川 玲奈氏	
事例発表④	27
「香露茶館の中国茶とマイボトルサービス」 講師：中国茶専門店「香露茶館」オーナー 田名部 康平氏	
トークセッション	29
「マイボトル・マイカップが使いやすい社会づくり」 コーディネーター （有）ボイスオブサッポロ 代表取締役 橋本 登代子氏 パネラー ペオ・エクベリ氏（環境コンサルタント・エコライフスタイルアドバイザー） 菊地健二氏（北海道エネルギー(株)総合企画本部 業務部 部長） 小野隆則氏（北海道エネルギー(株)総合企画本部 業務部 販売企画課 課長） 田名部康平氏（中国茶専門店「香露茶館」オーナー）	
閉会挨拶	34

開催概要

平成 22 年度

3R 推進北海道大会 2010

- 開 催 日 / 2010 年 10 月 17 日 (日) 10:00 ~ 16:00
- 会 場 / サッポロファクトリー (アトリウム・ファクトリールーム)
(札幌市中央区北 2 条東 4 丁目)
- 主 催 / 環境省北海道地方環境事務所
- 共催・後援 / 経済産業省北海道経済産業局 / 農林水産省北海道農政事務所 / 北海道 / 札幌市
- 協 力 / 3R 活動推進フォーラム
- 参加者数等 / 「講演・トーク」 延べ 314 名・「展示・体験コーナー」 延べ 800 名



会場全体



3R ステージ



3R わくわく講座

3R関連パネル・製品展示



インフォメーション

3Rクイズラリー



オリジナルタンブラーシート製作



3Rアトラクションゲーム



オリジナルマイボトルケース製作



講演会進行プログラム

時間	次第	内容
10:30	開会	
10:31	開会の挨拶	環境省北海道地方環境事務所 所長 吉井 雅彦
10:35	平成22年度 「北海道ゼロ・エミ大賞」 表彰式	<p>【贈呈者】 北海道環境生活部長 田中 正巳</p> <p>【受賞者】</p> <ol style="list-style-type: none"> 〈大賞〉 大林・伊藤・岩田地崎・丸彦渡辺・中山・田中共同企業体 北洋大通りJV工事事務所 (株)大林組札幌支店 安全環境部長 朝野 政行様 〈優秀賞①〉 津別単板協同組合 丸玉産業(株) 取締役札幌支店長 蛭子 弘幸様 〈優秀賞②〉 北清企業株式会社 取締役社長 大嶋 武様 〈優秀賞③〉 社会福祉法人清水旭山学園 理事 太田 民生様
	贈呈者挨拶	北海道環境生活部長 田中 正巳
	受賞者代表挨拶	〈大賞受賞者〉 大林・伊藤・岩田地崎・丸彦渡辺・中山・田中共同企業体 北洋大通りJV工事事務所 (株)大林組札幌支店 安全環境部長 朝野 政行様
11:00	講演・トーク マイボトル・マイカップ が使いやすい社会づくり	3Rトーク 「マイボトル・マイカップからはじめるエコ入門」 講師：ペオ・エクベリ氏
11:30		事例発表① 「マイカップから始まった社内の環境への取り組み」 発表者：パタゴニア日本支社 環境担当 篠 健司氏
		事例発表② 「『なかしべつ330(さんさんまる)° 開陽台マラソン』 が取り組んだ『マイカップ運動』」 発表者：なかしべつ330° 開陽台マラソン実行委員会 事務局 蟻戸 昭智氏・牧野 司氏 (中標津十二楽走)
12:30	トークセッション 「マイボトル・マイカップが使いやすい社会づくり」 コーディネーター：橋本 登代子氏 (司会者) パネラー： ：ペオ・エクベリ氏 (3Rトーク) ：篠 健司 氏 (事例発表者①) ：蟻戸 昭智氏・牧野 司氏 (事例発表者②)	
13:00	休憩	
14:00	講演・トーク マイボトル・マイカップ が使いやすい社会づくり	3Rトーク 「マイボトル・マイカップからはじめるエコ入門」 講師：ペオ・エクベリ氏
14:30		事例発表③ 「北海道エネルギーのECOチャレンジ～マイボトル・プロジェクト～」 発表者：北海道エネルギー株式会社 総合企画本部 業務部 部長 菊地 健二氏・環境企画課 竹川 玲奈氏
		事例発表④ 「香露茶館の中国茶とマイボトルサービス」 発表者：中国茶専門店「香露茶館」 オーナー 田名部 康平氏
15:30	トークセッション 「マイボトル・マイカップが使いやすい社会づくり」 コーディネーター：橋本 登代子氏 (司会者) パネラー： ：ペオ・エクベリ氏 (3Rトーク) ：菊地 健二氏 小野 隆則氏 (事例発表企業③北海道エネルギー) ：田名部 康平氏 (事例発表者④)	
16:00	閉会の挨拶	環境省北海道地方環境事務所 統括環境保全企画官 伊藤 孝男
16:03	閉会	

御挨拶

皆様、おはようございます。ただ今、ご紹介いただきました環境省北海道地方環境事務所長の吉井でございます。本日は大変お忙しい中、ご来場いただきまして本当にありがとうございます。3R推進北海道大会2010の開会に当たりまして主催者を代表いたしまして心から御礼申し上げますとともに、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

毎年10月は3R推進月間でございます。3R推進月間は1991年より始まっており、2002年まではリサイクル推進月間と呼んでおりました。しかし、リサイクルのみならず原材料の使用量を減らすリデュースや繰り返し使うリユースに取り組むことが重要であることから3R推進月間と改め、関連した様々な行事が全国的に展開されているところでございます。

北海道地方環境事務所といたしましても、この期間中廃棄物の適正な輸出入の促進、あるいは不法投棄対策、家電リサイクル等の法の遵守に向けて取り組みの強化を行いますほか、この3R推進北海道大会を北海道経済産業局、北海道農政事務所、北海道、札幌市などのご協力をいただきながら開催しております。

この3R推進北海道大会は、ごみやリサイクル問題などの知識や経験を交換することにより参加者一人ひとりが循環型社会の実現に向かって自ら考え、行動していただく場を作ることとともに、ライフスタイルを見直す機会にさせていただこうということで開催するものです。特に、今年の大会では循環型社会の構築に不可欠な3Rの取り組みのうち、繰り返し使うリユースに焦点を当て、私たちの身近な問題でありますマイボトル、マイカップをテーマとすることといたしました。このマイボトル、マイカップはオフィス、学校、外出先で自分の水筒、タンブラー、カップ、湯呑みなどの飲料容器をマイボトル、マイカップを使うことでごみ、環境負荷を減らそうという取り組みです。

今日はマイボトル、マイカップをテーマにした事例発表、そしてスウェーデン生まれで在日18年目、環境教育の講演・セミナーなど23年間にわたって環境活動をされておられますペオ・エクベリさんとのトークセッション、クイズラリー、3R体験コーナー、企業や行政の取り組みを紹介します展示等、楽しみながら環境を学べるイベントを行うこととしております。また、3Rに関しますパネル等の展示や体験コーナーの一部ではリユースだけでなく3R全体に対する取り組みに関する物も扱っておりますので、そちらもご覧いただければと思います。

マイボトル、マイカップを持参された方、クイズラリー達成者には特別なサービスもありますので、積極的に会場内を見まわっていただければと思います。また本日はこの後、道内の企業における優良なリデュースの取り組みに対する表彰であります「北海道ゼロ・エミ大賞」の表彰式が行われます。受賞される皆様には、心から敬意と祝意を表しますとともに今後も循環型社会の構築に向けて先導的な役割を果たされますよう期待申し上げます。

最後になりましたが、本大会を契機といたしまして一層のごみの減量化、循環型社会の形成に向けての取り組みが一層進むことを祈念申し上げ、私の開会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。



環境省北海道地方環境事務所
所長 吉井 雅彦

平成22年度北海道ゼロ・エミ大賞

(主催)
北海道環境生活部

北海道ゼロ・エミ
大賞

大林・伊藤・岩田地崎 丸彦渡辺・中山・田中共同企業体 **北洋大通りJV工事事務所** (札幌市)

北洋大通センター新築工事のゼロエミッション化

工事に発生する建設副産物の再利用や、分別活動による混合廃棄物の削減などに取り組むとともに、広域認定制度の積極的活用など、新たな建設廃棄物の再資源化ルートの確立に取り組み、97%の高い再生利用率を達成しました。

北海道ゼロ・エミ
優秀賞

津別単板協同組合 丸玉産業株式会社 (津別市)

工場廃材のバイオマス資源としての利用

合板製造過程で発生する木くずや排水過程で発生する木質汚泥の燃料化、ボイラーで木くずを燃やしたときに発生する木灰の肥料化などの取組により、廃棄物の排出量を削減しました。

北海道ゼロ・エミ
優秀賞

北清企業株式会社 (札幌市)

廃石膏ボードのリサイクルによるグラウンド用ライン
引き粉の製造・販売

建築系廃棄物の中でも処理が難しいとされ、主に管理型処分場へ廃棄されていた廃石膏ボードを破碎分離、特殊製法によりグラウンド用ライン引き粉として再生しました。

北海道ゼロ・エミ
優秀賞

社会福祉法人清水旭山学園 (清水市)

食品残さ物(生ゴミ)の飼料化への取組

地域の29事業所から排出される食品残さ物を、収集運搬し、中間処理の工程を経て養鶏飼料として資源化、自家使用することにより、有効活用しています。

北海道ゼロ・エミ大賞表彰制度

北海道ゼロ・エミ大賞とは

道内の事業所における廃棄物等の発生・排出抑制の取組の中で、特に優秀なものを表彰し、広く紹介する制度です。循環型社会の形成に向けて道が推進している「3R(リデュース、リユース、リサイクル)」のうち、特に優先すべき事項であるリデュースを推進することを目的に、平成17年度に創設しました。

制度の概要

募集期間に申請のあった取組について、「北海道ゼロ・エミ大賞選考委員会(学識経験者等で構成)」において、取組による発生・排出抑制の効果や他の事業者への普及性などの観点から選考を行い、道が受賞者を決定します。

表彰された取組については、表彰式の実施、道が発行する3Rハンドブックへの事例掲載、ホームページでの公表などの積極的なPRをすることとしています。

北海道ゼロ・エミ大賞のホームページ

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/jss/recycle_2/zero-emi/index.htm



開会の挨拶



大林・伊藤・岩田地崎・丸彦渡辺・中山・田中共同企業体
北洋大通りJV工事事務所様



津別単板協同組合 丸玉産業株式会社様



北清企業株式会社様



社会福祉法人清水旭山学園様



受賞四社の皆様



受賞者代表挨拶



受賞者代表挨拶



贈呈者挨拶



表彰式全体風景



記念撮影

3Rトーク

『マイボトル・マイカップから
はじめるエコ入門』

環境コンサルタント・エコライフスタイルアドバイザー
ペオ・エクベリ 氏



ご紹介いただきありがとうございます。皆様、グッドモーニング。マイカップ、マイボトル、3Rについて話しますが、いろいろなデータも出ます。データはWWF、日本とスウェーデンの環境省、国連などによるものです。私はスウェーデン人で東京に住んでいます。結婚は九州でしました。妻は日本人です。

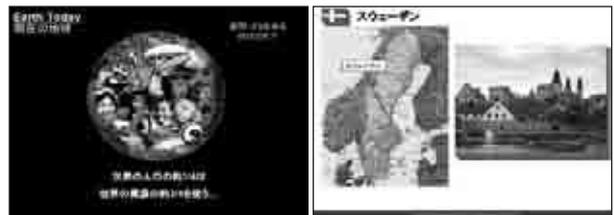
スウェーデンは北欧で一番大きな国です。私の出身である南スウェーデンは気候が北海道と全く同じです。今日の私の話を聞いて、きっと北海道でもできると感じてもらうとうれしく思います。また、スウェーデンは環境先進国として知られています。先進国としてごみが減っています。最近20年間ですでに97%減っています。温暖化の原因であるCO₂も減っています。そして同じ時期に経済成長率は44%アップしています。世界でもあり得ない、素晴らしい事例です。

今日は環境先進国であるスウェーデンのいろいろな面白いヒントをご紹介しながら、日本で何ができるか考えます。スウェーデンの成功した理由の1つは3Rです。リデュース、リユース、リサイクルのお陰です。これは日本に居ながら私たちにもできます。

今日のテーマはマイボトル・マイカップです。私たちはこれをなぜ使わなければいけないのでしょうか。使い捨てでもいいではないかと言う人もいます。しかし、それによって資源がどんどん無くなっています。現在、私たち人間はいろいろな使い捨ての物を含めていろいろな物を作り過ぎるため、自然が回復することができなくなっています。というのは、自然に返すことができる以上に物や資源を取ってしまっているのです。だからなかなか自然が回復しません。

ごみを作るのは誰でしょうか。この美しい地球には約3,000万種の生き物がいると言われます。この種類の中で、ごみを作る、捨てるのは1種類だけです。私たち人間だけです。CO₂を作り出すのも人間だけだと考えたことがありますか。他の生き物は自然の中ではいつも自然に返す以上に取らないのです。私たちは動植物の世界から学ばなければいけません。

では、だめな人間の世界を見てみましょう。世界の人口の4分の1は先進国の人々です。スウェーデン人、日本人、アメリカ人など。その4分の1だけの人間が現在、地球の資源の4分の3を使っています。木とか水、石油など。簡単に考えると世界中の全ての人々が先進国の人たちと同じような使い捨てのライフスタイルを始めれば地球が足りません。あと3つの地球が必要と言われます。地球が1, 2, 3, 4。



でも解決する方法は意外に簡単です。NASAに今度宇宙に行く時に「もう1つの地球をお願いします」と頼みます。そう言えば先月、地球に似ている惑星が見つかりましたね。あと2つの地球があればいいですね。でもちょっと面倒なので、現実的なのは1つの地球で物を使いましょうということです。

これは「ワン・プラネット・ライフスタイル」とも呼ばれています。1つの地球範囲のライフスタイルです。今、使い捨ての物を作って資源がどんどん無くなっています。皆、資源を公平に使うためにはあと3つの地球が必要です。だから1つの地球範囲で使いましょうということです。

数字で考えれば、私たちが今まで使った資源の量の4分の1まで減らさないといけません。ごみなどを75%減らすと何となく自然が回復できるのではないかという世界の数値目標があります。ファクター4と呼ばれています。あるいは4倍効率アップ。物を4倍、長い時間使おう。リユースです。これは意外に簡単です。

例えばコーヒーショップ、カフェ、喫茶店に行く時に「1つの地球」の飲み方ができます。そこへ行く時に皆さん、何が欲しいですか。コーヒーが欲しいか、カップが欲しいか。答えは簡単です。飲み物です。日本のコーヒーショップではレジで

マグカップをお願いするとくれます。実際にマイカップを持って行って、あるいはマイタンブラーを持っていくと、使い捨てのカップの代わりにマイマグカップかマイタンブラーでコーヒーを飲むと、ごみが86%減るという調査結果があるので、さきほどの数値目標75%を達成します。しかも使う水の量も減っています。使い捨てのコップ1つを作るには20リットルという多くの水が必要なのです。

1つ、秘密を教えます。使い捨てのコップの代わりにマイカップでコーヒーを飲んでも味は変わりません。便利さを失わなくてもいいのです。ここが大事です。マイカップで飲むとリデュースとリユースにつながっています。しかもいろいろな店ではご褒美があります。これもマイカップ、マイボトルを広げるには大事だと思います。店によってはマイカップなどで30円とか50円の割引をしてくれるところがあります。よく利用する人は年間5,000円、6,000円も節約できます。おいしいです。これは一石三鳥になりますかね。

ご褒美と言えば、スウェーデンではすごく進んでいます。この映像を見てください。スウェーデンの首都ストックホルムです。人口は200万人くらいです。札幌とあまり変わりません。中心を流れる川です。ここで親子が泳いでいます。これは35年前には考えられなかったことです。当時は水が汚れ過ぎていて、排気ガスも多く、使い捨ての物からのごみも多かったため、水・空気が汚れていて泳ぐことはできませんでした。今泳げるようになったのは、ごみ、特に使い捨ての物が非常に減ったからです。



スウェーデンと日本のごみの量を比較しましょう。家庭ごみのリサイクル率です。スウェーデンの場合は97%は1回リサイクルかリユースします。日本はほぼ逆ですね。20%しかリサイクルしていません。8割は自然に流れてしまいます。スウェーデンも昔はそうだったのですが、分別とか使い捨ての物が減って、今はごみのたった3%だけが自然に流れるだけです。これをもっと簡単に言うと、日本人の毎月のごみの量は平均26キロです。スウェーデン1人当たりは月に2キロ以下です。サッカーボールの大きさくらいにしかないのです。スウェーデンの900万人ができるなら札幌の200万人はできます。

なぜスウェーデンでは使い捨ての物が減ってリ

サイクル、リユース、リデュースが出来たかという、1つはご褒美と便利さです。便利さを失わず、ご褒美もあるわけです。この映像は子供たちがごみを分別しに行ったところです。後ろに大きな容器が見えます。たくさんの穴がついている容器が並んでいます。これは分別のための便利な回収ボックスで全国の村、町にあります。しかも面白いのは24時間開放されています。これがカギです。つまり誰でも、どこでも、いつでもリサイクルできるシステムが出来上がっているのです。

これは大きなヒントではないかと思っております。私は日本に住んでいて一所懸命リサイクルしていますが、私が住んでいる所では火曜日が燃えるごみ、水曜日は燃えないごみ、木曜日は生ごみ、金曜日は何でしたか・・・。覚えにくいと思います。熱心なひとでないとなかなか参加できません。スウェーデンではいつでもどこでも、誰でも分別できるので、エコに熱心でない人でも参加できます。

そしてご褒美があります。ごみをそのまま捨ててもいいのですが、毎年2万円かかります。けれどしっかりと分別すると無料です。スウェーデンの人も人間ですからケチです。お金が欲しいので、このご褒美はとても大事ではないかと思えます。分別するとお金がかかる。ごみを捨てるとお金がかかる。ではなくて、ちょっとご褒美があれば楽しくいろいろできます。



マイボトルと言えば、スウェーデンではこのようなデポジット制もあります。これはスウェーデンのどこにでもある機械です。自動販売機とは反対の機能を持っています。日本ではコインを自動販売機に入れて飲み物を買います。スウェーデンでは飲み終わった飲み物の空きボトルをこの機械に入れるとお金が戻ります。大きなペットボトルですと60円ほど戻ります。これは非常にうまくいっています。20年以上も前から全国に導入されているシステムです。

リサイクル、リユースのボトルと言いますが、1度入れますと業者がそれを洗ってまた飲み物を入れて販売します。これは20回ほど繰り返されます。このご褒美と便利さのお陰でリサイクル率はなんと99%になっています。みんな持っていき

ます。日本ではフタをはずしてラベルもはがして洗って回収していますが、スウェーデンでは洗わなくてもいいのです。フタやラベルもそのままいいのです。ペットボトルをそのまま回収する技術を考えてのととても参加しやすいのです。

最近日本ではマイタンブラーを持っていくとすぐに店で飲み物を入れてくれるところがあります。結構便利になりました。特に東京ではすごく広がっています。私が教えている大学の学生でもマイタンブラーを持ち歩く人が非常に増えています。

1つの面白いエピソードをお話します。私はよく出張します。温暖化防止のためにできるだけ電車を利用してきます。明日、東京に帰るのも電車にしています。ある時、乗り換えの駅で10分しかない時、のどが渴いたのでマイタンブラーにオレンジジュースを入れてほしいと店に頼んだら断られました。どうしてかと聞くと、この店では座らないといけないと言われました。それで座ってメニューを見て注文し、運ばれてきたジュースをタンブラーに入れ、レジでお金を払って出てきました。

その後、そのお店でマイボトルキャンペーンが始まりましたから、このようなことがあっても諦めないでください。できませんと言っても、よく説明すれば店もお客が増えるきっかけになります。私が店の言うままに諦めていたら店はお客を失うことになります。ビジネスチャンになるわけです。

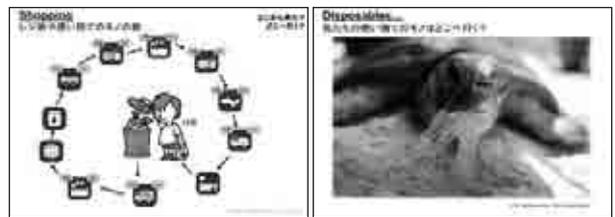
よく聞かれるのは、エコについてスウェーデン人のマインドと日本人のマインドは何が違いますかということです。やはり有言実行だと思います。ちょっと厳しい言い方ですが、精神的にも知識的にも日本はすでに環境先進国です。絶対そうです。本当に環境に対して関心を持つ人が増えています。しかし残念ながらスウェーデンに比べると有言実行ではないような気がします。結果がなかなか出ないし、CO₂も増え続けています。ごみもなかなか減りません。けれど本当に有言実行になれば日本はスウェーデンよりも環境先進国になるのは間違いと、私は希望を感じています。有言実行です。



使い捨てと言ったらレジ袋ですよね。最近、東京都内でランチにコンビニで弁当を買おうと多く

のサラリーマン、OLが並びます。100%レジ袋を貰います。この映像を見てください。皆貰っています。男性ばかりでなく、女性も結構貰っています。これは私から言うと有言実行ではないのです。20年前からマイバッグキャンペーンがあったはずですが、これから大事なマイボトル、マイカップでも20年後にはこのようにならないように意識しながら有言実行することです。

結局、会社として有言実行は信用につながります。ビジネスチャンスです。自分がエコな会社ですと、きれいなCMを出すのはいいのですが、社員が日常生活でも有言実行すれば、客の側では「やはり信用できる会社ですね」ということになります。それで経済もよくなります。これもスウェーデンの失敗事例で学んだことです。



レジ袋ばかりでなく、マイカップ、マイボトルでない、使い捨てのカップやボトルは意外に大きな環境負担になります。毎年10万頭以上の野生動物が私たちが捨てたプラスチックを食べて死んでしまいます。鳥が100万尾以上死んでいます。少なくとも動物を助けるためにもマイカップ、マイボトルを使いたいのです。この映像ではレジ袋をごみとして捨てます。何が悪いのかと思われませんが、実際に長い旅があります。物はどこから来たのでしょうかという質問があります。どこへ行くのかという質問があります。考えると素晴らしい旅を見ることができます。レジ袋やプラスチックの使い捨てのコップなどは、もともとどこから来たのでしょうか。コンビニより前です。石油です。石油ができるまでは何年かかりますか。むずかしい質問ですね。100万年以上と言われます。100万年かけて作られた使い捨ての物はどれくらい使うのでしょうか。

この映像を見てください。石油ができてそれを工場まで運びます。工場では石油からレジ袋、使い捨てのコップ、使い捨てのボトルを作ります。そのボトルを運んでやっと店に入ります。長い旅です。ここに12分と書いてありますが、これは何でしょうか。私たちがレジ袋を使う平均の時間です。たった12分です。使い捨てのコップはマラソンでは12秒くらいでしょう。やはり再利用、リユースカップをマラソンで使うのは素晴らしいアイデアだと思います。

さらに旅が続きます。焼却炉に行って、捨て場に捨てられます。この長い旅を考えると、マイボトル、マイカップは使いやすいですね。この旅を

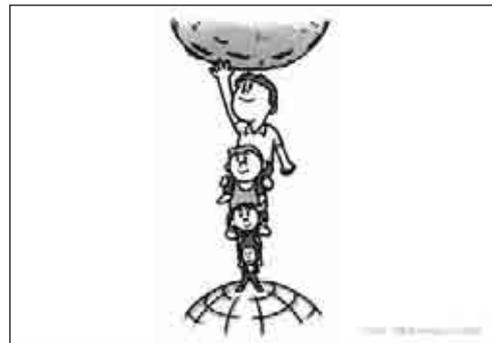
考えた面白い会社がスウェーデンにあります。スウェーデンのマクドナルドです。使い捨ての物が一杯あると言われますが、マクドナルドでもスウェーデン最大の140カ所あるホテルチェーンでも、2030年までにCO₂ゼロを目指してミネラルウォーターが入っているプラスチックボトルの利用を止めました。自分のボトルを開発したのです。この長いガラスのリサイクルボトルです。スウェーデンの水泳の金メダリストと一緒に開発したボトルで、ミネラルウォーター並みの水道水に炭酸水を加えて、スタンディングボトルを、マクドナルドボトルとしてデザイン性のある物を出しました。かなりいいボトルです。このようなことをやると面白いと思います。



お客さんはお金を払ってこのボトルを買い、飲み終わってカウンターへ戻すとお金が戻ります。デポジット制です。日本でも最近、格好のいいボトルがたくさん出ています。かなりかわいいものもあります。いろいろ選択できます。日本の素晴らしさの1つは、やはりより賢い選択肢がいつもあります。必ずあります。物があふれている社会ですから、本当に多くの選択肢がいつもあります。物はどこから来てどこへ行くのかを考えると、面白い選択肢ができます。

まとめますと、マイボトル、マイカップ、マイライフが成功するための鍵ではないかと思っています。1、デザイン性のよい格好のいい物を作る。イマジネーションです。そしてご褒美。エコをすると何かご褒美を貰う。そして便利さです。これがとても大事だと思います。不便になるとなかなか皆参加しません。最後にはもちろん有言実行です。もちろん、私と妻もいつでもできるだけ使い捨てのものは使わずに有言実行するのですが、5、6年間かけてやっどごみの量が月にサッカーボール1個分になるという結果が出ました。これはスウェーデン人900万人がやっていることです。彼らの知識を導入し、そして日本の素晴らしい考え方に合わせてやると出来たのです。CO₂ 25%減は日本の2020年までの数値目標です。私と妻はそれを達成しました。お金にして年間24万円から25万円節約になります。日本でも可能な目標なんです。

私たちは地球4個分で生きています。環境問題を聞いているとすごく大きな問題に思われますが、実際には思ったより解決しやすい。日本だからこそいろいろ出来るのです。小さなステップから始まれば本当に簡単になります。少しずつやれば大きな結果になります。これはスウェーデンの教科書にも載っている写真、イラストです。私たち1人ひとりには月までは届きませんが、全ての人間が肩車すると地球から月まで届きます。1人ひとりが小さなステップから始めればマイボトル、マイカップを始めれば絶対大きな結果になります。積極的にぜひ有言実行しましょう。



事例発表①

『マイカップから始まった
社内の環境への取り組み』

発表者:パタゴニア日本支社 環境担当
篠 健司 氏



本日は、3R推進の北海道大会2010にお招きいただき、本当にありがとうございます。ご紹介いただきましたようにパタゴニアという会社はアウトドアのウェアを作っています。今日はマイカップから始まった主に社内の取り組みをご紹介します。

最初に、アウトドアスポーツのことをご存じない方のためにいくつかきれいな自然スポーツの映像をみていただきたいと思います。私共の会社は、機械の力に頼らないアウトドアスポーツ、人間の力で自然の中に出るスポーツを対象にしています。これはクライミング、岩場を登っている写真です。きれいな風景の山でのトレッキング、あるいは、ニセコのスノーボードの写真です。これは、トレイルランニングと言いまして山の中を走るスポーツです。さらにサーフィン、フィッシングなどの写真です。

会社は神奈川県鎌倉にあり、本社はアメリカのカリフォルニアです。北海道にも札幌市内に2店舗あります。会社ではGOHOキャンペーンを展開しておりまして、マイカップ、マイボトルとの兼ね合いを含めてご紹介いたします。GOHOはゲッティング・アワ・ハウス・イン・オーダーの頭文字です。自分の家の身の回りをちゃんときれいに見直すという意味です。

いくつかのプログラムがあり、その中で3Rの1つ、廃棄物の発生を抑制しようということがあります。1つには消費そのものの見直し。これはリデュースにつながると思います。あとは分別です。どうしても出てきたものはきちんと分別して処理をします。

3Rとは関係ありませんが、例えば調達するもの。私たちはビジネスを通じていろいろな物を使用していますので、その調達をする上で、例えば紙に関して言えば原生林とか違法に伐採されたものを使わないようにする。そういったガイドラインを作ったり、あるいは自然エネルギー。事業をする上ではどうしてもエネルギーを使いますので、そこに目を向けて今では私たちの日本のビジネスというのは全国に16店舗を持って行ってい

ますが、そこで使うエネルギーを基本的には100%自然エネルギー、実際にはグリーン電力証書という形で調達しています。自然エネルギーでまかなうビジネスをさせていただいています。

このように社内を見直すことによって、いろいろ出来ることが見えてくるのではないかと思います。その中の1つが、どちらかという社員が消費するペットボトルとか使い捨てになるような物の見直しの中で始まったのが、全部マイカップ、マイボトルにしたことです。その映像です。日本支社が出来て20年ほど経ちますが、20年前から普通に社内で行って行きましたし、アメリカ本社では30年くらい前から、こういった使い捨てる物はほとんど使われていないと思います。

ですから、今日発表するに当たって特別に何かをプログラムとして行ってきたわけではないので、難しかったのですがいくつかご紹介すると、例えば、社内ではこういったウォーターサーバーを各事業所に置いています。ですから、社員はわざわざ外にペットボトルなどを買いに行かなくても、会社の中で自分のボトルに給水して飲むというのを繰り返し行うことができます。

あとは、こういったことを広げるに当たってNPOの方が実施しているマイボトルを推進するキャンペーンに協力しています。Think the EarthプロジェクトというNPOがありますが、そこが毎年ウォータープラネット・キャンペーンというのを行って行っておりまして、その中で消費者の方、一般の生活者の方にできるだけマイボトルを持って生活しようと呼びかけています。

この時にも私共の札幌の店舗でも、ウォーターサーバーを設置して、マイボトル持参で来店の方に給水サービスをしたりしています。今回もこの会場でも給水サービスされていると思います。そういったことを過去何年間ずうっと続けてきています。

こうしたマイボトル、マイカップとアウトドアスポーツの関係はどのようなことかをお話します。この映像はあるアウトドアスポーツ、特に山の高い所に登っている登山家の1シーンですが、この下のほうにボトルが置いてあるのが見えます。

最初にお見せしたアウトドアスポーツというのは、町と違ってどこでも給水できるわけではありませんね。例えば山の中でも全く水の無い場所も、もちろんあります。このように雪がある所なら雪を溶かして水にすることもできるかもしれませんが、基本的には水を自分で調達して、あるいは持っていかねばなりませんので、実はアウトドアスポーツをやる人たちにとってはマイボトルやマイカップは当たり前になっていると考えております。

この映像は、私共の社員の普段のアウトドアスポーツの1シーンです。右は岩登りに行った時にマイカップを持っている場面です。左は今年の9月に山の中を110キロメートル走るイベントでの1シーンで、やはりマイボトルを持って、そこに給水しながら走っている人たちの姿です。

このように、アウトドアスポーツとマイボトルは結構身近で、私共の社員も同じようなライフスタイルをとっているということです。例えばどんなボトルを使っているかということ、先ほどのエクベリさんの映像にもありましたが右側がスウェーデンの会社のものです。アルミで出来ているボトルで、中に水を入れても匂いがつきにくいボトルです。真ん中はクリーンキャンティーンという会社のもので、これもステンレススチール製でとても洗いやすいものです。実はこの2つの会社は売上の1%をさらに環境保護団体に寄付をするということをしています。

ですから、マイボトルの選び方というものも多分これから、ただ単にマイボトルにするだけではなく、そのボトルが何からできているとか、どんな会社なのかとかいうことをもっと考えながら選ぶというのも1つの次のステップかと感じます。その隣はプラスチックのボトルですが、下にBPAフリーと書いてあります。BPAとはビスフェノールA、いわゆる環境ホルモンと言われている素材の1つです。素材によってはそのような環境ホルモンが使う状況によっては出てきかねないものもあるので、最近ではこのようにBPAフリーのものというのを使う、あるいは販売するボトルの会社が増えていきます。ですので皆さんも選ぶときにただ単にマイボトルではなくて、素材自体も見ていくということがこれからは必要なかと感じています。

私もランニングをするので、この後の中標津さんのマラソン大会のことで詳しく話されると思いますが、いつもこのようにマイボトルを持って走っています。そうすると例えば水道があればそこで給水して、あるいは公園や図書館に行ってまた給水して走るということで、ペットボトルなどを消費しなくてもこうしたスポーツは楽しむことができると思っています。私も過去5年くらいでペットボトルを消費した量というのは1本か2本

です。それでも十分今のライフスタイルは送れると考えています。

ここからはペットボトルやマイボトル、マイカップとは少し離れますが、私共で衣類を作る上でやはり3R、循環型の取り組みをいくつかしているの、その辺も含めてご紹介します。パタゴニアという会社は元々は登山道具を作るところから始まっています。1980年くらいに、今では有名になったフリースや暖かく乾きの早い下着とかを作って成長してきて、現在でもそれがビジネスのかなり大きな中心となっている素材です。ただ、こうした素材自体実はポリエステルで、元々はレジ袋と同じく石油が原材料です。ということはCO₂を排出したり、何らかの影響が出ているのではないかと感じ始めています。

それでやったことというのは、その製品が原料の調達から廃棄に至るまでどのような影響、フットプリントと言いますが、影響の度合いを調べました。そうすると全部の製品が素材が環境を汚染していることが分かりました。どれ1つとしていいものはないということが分かってきました。実は先ほどから出ているペットボトルの素材を再生して衣類を1993年に世界で初めて製品化して、今では例えばいろいろなユニフォームがペットボトル素材で作られています。それよりもかなり前にこのようなことを行っています。

あとはオーガニックコットンという、農薬を使わずに栽培されたコットン素材を使ったりしています。これも水というところで農薬を使わないことで水質が保たれたりいろいろな意味を持っていますので、今日の話に少し通じるかと思っております。大きく今回の3Rの話と衣類の関係でつながっているのは、私共は販売した製品をもう1度回収して、それを原料に戻して循環させるという取り組みをしております。現在、大体7割くらいのパタゴニアの製品が回収されて循環するという仕組みを取り入れています。

そうしたものを環境に配慮したEファイバーという形で販売しております。もう1つ、せっかく環境に配慮して使った素材なので先ほどのレジ袋の一生がありました。私共はリサイクルできるリサイクル素材100%のデポジット制のレジ袋を店舗で使っています。特徴としてはデポジット制なので、お客様は利用する時には100円頂いておりますが、その袋をまた持ってきていただければ100円はお返しします。その段階でできるだけマイバッグを持っている人はそれを利用いただき、持っていない人は袋を利用いただき、また持ってきていただく。その袋はリサイクルして使います。素材自体もパタゴニアの社内で出たレジ袋もプラスチックバッグを原料にしているので、素材自体も100%再生素材です。

ですからこれは、お客様のご協力がいただけれ

ば、本当に循環するレジ袋の仕組だと考えております。こうした事業をしながらも、やはり自然環境、アウトドア、フィールドの自然に依存していますので、そういった方たちをサポートする取り組みも行っています。売上の1%を環境保護の団体や、そういったことに関わるところに寄付をするなどさせていただいております。そうしたビジネスをより広げるために、1% for the Planetというビジネスを集めたネットワークを作っていて、今大体世界の1400社くらい、日本でも30数社が加盟していただき、1%を寄付していただいております。先ほど紹介しましたマイボトルのクリーンキャンティーン社もその1社として加盟いただいております。

企業としてなぜこういうことをしていくかということをご紹介します。デビッド・ブラウアーさんというとても有名なアメリカの自然保護の父と呼ばれる方の言葉ですが、「死滅した地球ではビジネスはできないのだ」と。私共も事業をやっている限りは100年、あるいはもっと続けていきたいと考えていますので、そのためにはやはりビ

ジネスをするために必要な自然環境、自然を守っていくことが必要だと考えています。

最後ですが、パタゴニアにおいては利益を上げることが最終目的ではなく、利益が必要でビジネスをしていますが、正しくそのことを行えば自ずと利益がついてくるだろうと考えながらやっていて、このペットボトル、マイカップ、マイボトルの取り組みというのも正しい行いだということをやっていて、おそらくビジネスとは言っていますが、地域とか社会全般としてこの方向性と言うのは正しい取り組みで、将来的には私たちも含めて未来の子供たちが幸せに暮らせる社会を作るために必要な取り組みだと思っていますので、今後とも会社としてこういったことに貢献していきたいと考えております。



事例発表②

『なかしべつ330°開陽台マラソンが
取り組んだマイカップ運動』

発表者:なかしべつ330°開陽台マラソン実行委員会事務局
蟻戸 昭智氏・牧野 司氏



(蟻戸) 皆さんこんにちは。本日は中標津のマラソン大会で取り組んだマイカップ運動について、牧野と2人でお話したいと思います。まず、なかしべつ330°開陽台マラソンですが、平成21年に第1回大会が開催されました。今年は第2回大会を予定していましたが、口蹄疫ウィルス侵入防止措置とし残念ながら中止となってしまいました。

そのマラソン大会は、クリーンでエコな大会を目指してマイカップ運動と名付けた取り組みを行いました。給水所におけるマイカップでの給水、利用した紙コップやスポンジはごみ箱に捨てる、といったことを参加者によびかける取り組みです。今日のトピックです。まず始めに、なかしべつ330°開陽台マラソンについて開催に至った経緯などを説明します。その後、マイカップ運動の取り組みのきっかけや内容などについてお話ししたいと思います。

まず、中標津町は道東、根室管内に位置する町です。人口およそ2万4,000人。基幹産業は酪農業。観光名所としては視界330度、地球が丸く見える開陽台、養老牛温泉や根釧台地の格子状防風林などがあります。また、最近では映画「釣り馬鹿日誌20ファイナル」のロケ地となったことでも知られています。

近隣の地域を見ますと、世界自然遺産の知床国立公園、その他数々の自然公園が存在しております。まさに自然に囲まれた環境にある町となっています。中標津町では以前にもなかしべつマラソンという大会が続けられてきました。参加対象は町内に限定された者、最長で5キロメートルという競技種目、コースについては小学校のグラウンドから裏山の公園通りを走るコース、こんな大会が行われてきました。

他の地域で開催されている大会については、ランニングブームによって参加者が増えている中、中標津町の大会は参加者が減少し続け、マラソン競技の先細りが大変懸念されておりました。そこでマラソンの普及と競技性のさらなる向上を図り、地域の活性化に結び付ける大会を目指して地域の行政やスポーツ団体、陸上競技団体、マラソ

ン愛好者などで組織する実行委員会を立ち上げました。

参加対象規模、競技種目、コースなどを見直して内容を一新しました。さらには皆さんに長く愛され続ける大会を目指して、大会の名称を一般公募しました。109件の応募の中から「なかしべつ330°開陽台マラソン」が誕生しました。生まれ変わった大会では全国から参加者を募りました。競技種目についてはハーフマラソン、5キロメートル、約2.1キロメートルのミニハーフ、こういった競技種目も充実しました。また、コースにつきましては、地域の住民の方に少しでも関心を持って頂く意味でも、市街地の主要道路を含めた自然豊かなコースを設定しております。多くの方の理解と協力のもとで開催される運びとなりました。

これからマイカップ運動についてお話ししますが、ここからはこの運動の発案者であり、地元の走友会で自身もランナーとして中標津十二楽走で活躍している牧野より紹介したいと思います。

(牧野) まず、きっかけについてお話ししたいと思います。この光景をご覧ください。参加規模により多少は違いますが各地のマラソン大会で見られる光景です。ここに落ちているのは参加者が給水に使った紙コップです。給水所の周りに紙コップが散乱しています。マラソン大会をテレビ中継でしかご覧になったことのない方は、このような光景を見たことがないかもしれませんが、これはこの写真が特別なものではなく、悲しいですが一般的に起きていることなのです。

この散乱する紙コップをどうにかしたい、というランナー集団である中標津十二楽走メンバーの強い思いから運動は始まりました。マラソン大会を行っていくためには参加者、運営者、ボランティア、応援者、地域住民、関係する皆さんの大会に対する理解・協力が必要不可欠です。これがどれか1つでも欠けるとマラソン大会は持続的に開催されることはないでしょう。

私たちのマラソン大会は 大部分のコースが牧草地帯に設定されていますが、コース脇の牧草地に紙コップが捨てられていたら、豊かな自然を汚す

ようなことがあったら、応援者、地域住民の理解・協力が得られるでしょうか。こういった背景の下、少しでも紙コップが散乱する状況を減らし、クリーンでエコな大会を目指そうとうことになりました。

実は、もう1つのきっかけもありました。大会に他にはない特色を出したいという背景があったのも本当のところではあります。まず、コースで特色を出すことを考えました。コース風景、コース上から見える空港、そして中標津町を代表する山・武佐岳、どこまでも牧草地帯に伸びる直線コース、また、コース上で待ち受ける強烈な3つの坂、上り坂、下り坂、最後にまた強烈な上り坂、なかなか変化に富んだコース設定です。

特色ある参加賞。地元産のじゃがいもを使ったパンやいも団子のお汁粉。これがそのパンですが、中にごろっといもが入っていて、マヨネーズが乗っていて焼かれている非常に美味しいパンです。大会に特色を出すためにこのような工夫はしましたが、これだけではちょっと弱いと、環境に配慮した取り組みはどうだろうという考えがあったことも事実です。

こんなきっかけで始まったマイカップ運動ですが、実際にどんなことを行ったかを説明します。まずは大会前の計画、準備についてです。まず、どうしたら散乱する紙コップは減るのだろうかというので、散乱する理由を運営者、参加者それぞれの視点から考えました。運営側の原因としてごみ箱の大きさ、設置している位置、数など適切にごみ箱をしっかりと準備していないのではないだろうか。また、運営するほうもポイ捨てが当たり前とされていてごみ箱にすててもらえない気がしない。また、捨てもらいたくないけれど参加者に評判が悪い大会になってしまうのではないかとこの気持ちから、積極的にごみ箱に捨ててくださいと働きかけることをしていないのではないかと。さらに使い捨ての紙コップを使うこと自体が原因ではないかと考えました。

参加者側の原因としてはごみ箱があっても捨てるべきだけれど、レースなんだから仕方がないなどごみ箱に捨てる意識がない。そういうものが不足している。また、そもそもポイ捨てが当たり前とされていてごみ箱に捨てる意識がない。このようなことが原因ではないかと考えました。全体としてマラソン大会では当たり前の光景とっていないだろうか。こんなことが紙コップ散乱の原因ではないかと考えました。

そこで私たち中標津十二楽走はマイカップ運動と名付け、次のような提案を行うことにしました。紙コップを散乱する状況を少しでも減らし、クリーンでエコな大会を目指して大きく3つの呼びかけを行いました。マイカップで給水をと、給水所でのタイムロスがあまり気にならない

選手にはマイカップ、マイボトルでの給水を呼びかけました。ごみはごみ箱へと使用後の紙コップ、スポンジをゴミ箱へ捨てるように呼びかけました。

クリーンでエコなマラソン大会について考えようとポイ捨て、紙コップ散乱が当たり前とっていないだろうか。クリーンでエコな大会について考えてみようと呼びかけを行いました。このような呼びかけを行い、きれいなコースで魅力あるマラソン大会を開催することを目指しました。

参加者にただ呼びかけるだけでなく、この運動に取り組んでもらうために運営者側として次のような取り組みを行うことにしました。マイカップグッズの紹介・配布、マイカップ対応の専用給水所を設置することにしました。捨てるやすいゴミ箱の設置、捨てるやすい環境の整備を行うことにしました。マイカップ運動の趣旨・具体的な取り組みを理解してもらうための参加者用のPR資料の作成・提示・配布を行うことにしました。

これらのことを実施するために、それぞれ次のような検討を行いました。携帯しやすく飲みやすいマイカップとはどんなものを準備すればいいのだろうか。ロスタイムが少なく、一般給水のランナーがいる中で、自然に給水する方法は。捨てるやすいゴミ箱の形状・大きさは。捨てるやすいゴミ箱の設置位置は。給水地点からどれくらい離れていれば捨てるやすいか。ごみ箱の存在を知らせ、捨てるように表示方法は。クリーン、エコ、マナーに関する他大会についての情報収集。このようなことを検討しました。

実は、この他大会での取り組みについての情報収集が非常に大きなポイントでした。なぜかと言いますと、マイカップ運動なるものを大会で行いたいと実行委員会で最初に提案した時、正直、反対意見が多数を占めました。第1回大会で準備すべきことはたくさんあると。大会をまずは成功させてからの取り組みではないか。大体、マラソン大会でこんな給水方法は聞いたことがない。参加者に良い印象を与えないのではないかと。他の大会で事例はあるのかと、このように消極的というか反対意見多数。積極的に行おうという雰囲気はまるでありませんでした。

このように実行委員会で運動を行うことを認めてもらうために他大会の事例を調べて、参加者用のPR資料を作成することは、参加者より前に実行委員会メンバーを説得し、運動を理解してもらうために非常に重要な取り組みとなりました。調べてみるといろいろとこのような事例があることが分かりました。まず、左一番上からいきますが、下関海峡マラソン大会の例です。運営側が、大会要項で紙コップのごみ箱への投げ捨てることを参加者に呼びかけています。次は、ウルトラ・ランナーズクラブ、札幌にあるチームの北海道24時間走ですが、

この大会は周回コースと言いますが、同じところを何度も通るコースで走りますが、給水ポイントには参加者のナンバーを記入した紙コップを置いてあり、参加者は同じコップで何度も給水して走るとい大会です。次は、芦屋浜アスリートクラブの芦屋浜潮風ウルトラマラソン大会の例です。紙コップを洗濯バサミで帽子に止めて走り、給水所では同じコップを使い続けて走るとい例です。

右にいきまして、パラカップというチャリティマラソンの例です。リユースのコップを給水所で使っています。次は、オガマンさんというブログを書いている有名なマラソンランナーの例です。このように「私は捨てない」というステッカーを作ってユニフォームに貼って走って、紙コップなどのゴミ箱への確実な投函を呼びかけている例です。次も、やくもさんという有名なマラソンランナーの例ですが、ゴミ箱の設置が少ない大会で運営者側において自作のゴミ箱を設置してもらっています。

このような例があることが分かりました。このように参考にすべき取り組みが各地で行われていることが分かってきました。こういった事例を集め、運動実施に向けて実行委員会メンバーを説得していきました。これは今日お手元にも配布しているものですが、運動の趣旨、具体的にすること、調べた事例などをこのようなお知らせとしてまとめています。

これは、大会ホームページに掲載したり参加者に事前送付したりなどして運動をPRしています。これは新聞の地方版ですが、このようにメディアにも取り上げてもらい、少しずつ運動のことがPRされていきました。

検討したことですが、マイカップグッズの検討です。携帯しやすさ、給水しやすさ、価格などを考慮してこのような5種類のグッズを準備して提供することにしました。1つは紙コップを洗濯バサミで帽子に止めて走るとい1個のコップで給水して走する方法です。真ん中辺に並んでいるのは携帯型のコップです。その下にある白黒のが、口のところに板バネが入っている携帯灰皿です。これも紙コップ代わりに携帯して使えるのではないかと配布しています。このボトルは、スポーツドリンクの小さなペットボトルに100円ショップで購入した小さなカードリングと、ベルトを自分でつけて作った自作携帯ボトルです。このようなグッズを、準備して希望者に無料で提供することにしました。

マイカップの給水方法の検討です。走りながら止まらずに給水する一般ランナーと、停止して給水するマイカップランナーが混在する状況で、双方が安全に給水できるようにマイカップランナーに関しては少しでもタイムロスがなくて給水する

ように、専用の給水テーブルを設置して給水することにしました。これは、給水所を計画した時に描いた絵ですが、前3つのテーブルが一般給水ランナー用の紙コップが置いてあるテーブルです。その後に斜めになっているのが、マイカップランナー用の専用給水テーブルです。これを一段下げないようにして配置しました。また、マイカップ用の給水テーブルがあって、停止者がいることを知らせる看板を一般給水用の後に設置するようにしています。そしてロードコーン、ロードバーで停止者を分離するようにして安全性を確保しています。給水はその写真に出ている柄杓、ジョウロで行うことにしました。

次に捨てやすいゴミ箱の検討です。まず、とにかく大きくて走りながらでも捨てられるサイズのごみ箱を作ることにしました。走りながら給水していると、給水テーブルのすぐそばにごみ箱があっても、捨てようと思った時にはすでに走り去ってしまっていて、捨てることができません。ですから最終テーブルから距離を置いて10メートル、100メートル離れた所にごみ箱を設置することにしました。この先どれくらいの所にごみ箱があるか、ないのか、それが分かるかどうかでランナーとしての意識でごみを持って走ろうかということに関わってくるので、ごみ箱がどれくらい先にあるのかを知らせる看板も設置しています。この写真が大きめのごみ箱です。私たちはこの名前をごみではなくて、回収ボックスと名付けて設置しています。

このような計画・準備を行い、大会本番を迎えました。次に大会本番で行った運動のPR実施状況についてお話しします。PRについては前日と当日の朝、受付のそばにブースを設置して運動の説明、協力の呼びかけを行っています。このような看板を作り、運動の説明、具体的にどんなことをするのかを説明しています。これがブース全体像の写真です。マイカップグッズが並べてあって、さきほどの看板が並んでいます。PR用に作成した資料もその場で見てもらえるように掲示してあります。マイカップに挑戦しようという人にはこれらを無料で配布しました。

これが実際に受付にきた参加者に説明しているところです。皆さん、結構好意的に説明を聞いてくださいました。これが当日のマイカップの説明ブースです。このような感じでPR活動をして、前日当日の合計で120個ほどのマイカップグッズを参加者に配布しております。そしてハーフマラソン528名、5キロ158名、ミニハーフ195名、合計881名の参加者で大会がスタートしました。

私たちのコース上でのマイカップ運動もスタートします。大会全体の様子をテレビのニュース映像でご覧下さい。(ニュース上映)。参加者から

の声もいただきました。

マイカップの利用状況ですが、数的にはこのスタイル、紙コップを洗濯バサミでどこかに止めて走り、給水所で利用するのが多かったと思います。中には、事前のPRで取り組みを知って参加者自身が工夫したマイカップで参加した例もありました。これは計量カップだと思うのですが、テープでユニフォームに付けられるように工夫されています。このような参加者自らが、自分の使いやすいマイカップを持参して利用後は自分で洗い、また次回に使うというのが理想的な形だと考えております。これも紙コップの例です。コースもきれいで気持ち良かったと言ってくれています。

これは給水所の様子です。このように停止者がありますという看板を設置しています。これは5キロメートル地点のマイカップ給水所の様子です。この地点では、まだランナーがばらけていないので少し列ができていますが、タイムロスが気にならない人は、と呼びかけていますのでトラブルが起きるようなことはありませんでした。これも給水所の様子です。ここからは回収ボックス関係の様子です。このような回収ボックスがこの先、50メートル、100メートルのところにありますという看板を設置してアピールしています。

実際に回収ボックスに入れているところです。これは折り返し地点のスポンジの回収ボックスです。これを見ると選手の体が傾いているので、もう少し大きさがあってもよかったのかと考えております。この大会で優勝した選手もやはり回収ボックスに入れて走ってくれました。

これは給水所の様子ですが、コップの散乱が見られないことが分かると思います。参加者が少ない大会であるということもありますが、非常にきれいな給水所になっていると思います。ボックスの外に落ちているのは、ボックスに入れようと意識していたけれど落としてしまったものです。皆さん積極的に入れてくれたと思っております。

このような感じで大会当日のマイカップ運動が行われ、大きなアクシデントもなく終了しております。次に蟻戸から大会後の参加者から寄せられた課題、波及効果について説明します。

(蟻戸) 新たな第一歩を踏んだなかしべつ330°開陽台マラソンでした。まさに初めての取り組みばかりでした。今後の大会に参加者の声を生かすためにアンケート調査を行いました。マイカップの運動の取り組みについてハーフマラソンの参加者528人のうち174人から回答をいただき、6段階評価で集計しました。満足している部分を合わせるとおよそ74%になります。やはり紙コップの散乱が少なかったということ。あとマイカップの給水がスムーズだった。来年はマイカップ持参で参加したい、この活動を続けていきたいという声がありました。

一方、満足しなかった方はおよそ4%です。給水所で停止することによるタイムロスがある。それと一旦止まって再び走り出すには相当なエネルギーが必要、負担がかかる。また、マイカップを持って走るのはとても不便という声もあります。その他としては、この運動に対して期待を込めた要望ということで寄せられている声もあります。とても良い取り組みです。他の大会にも波及するようにもっと宣伝、情報公開してほしいなどです。

一方で、この取り組みに対する疑問の声もありました。本当にこの取り組みはエコなのかと。エコを掲げるのであれば、ほかにもっと取り組むことはないのかといった声です。これはランニング雑誌の1面ですが、参加者の方でこの運動について投稿しています。エコでクリーンな大会に感激として、本当にきれいな大会だったということの評価しています。やはりきれいなコースを走ることができたと言う点では、アンケートの結果を見ても、ほとんどの方に満足していただいたと感じております。また、書籍での紹介ということで、谷川真理さん監修の本にも、マイカップをランナーに呼びかけるマラソン大会は全国でも類を見ないとこの大会の特徴が紹介されています。

今後の課題としては、参加者がこれから増えたりした場合、タイムロスにならない給水方法やごみ箱の設置方法を検討していきたい。また、マイカップ以外でもクリーンでエコな取り組みについても、積極的に検討していきたいと考えております。この運動の直接的な波及効果と言えるかどうか分かりませんが、他の大会でも、意識してごみ箱に捨てるようになりましという声があります。また、以前は、ごみ箱が設置されていなかった大会でも、ごみ箱が設置されるようになったというランナーからの声も聞いています。

これらについては大会の運営者、参加者それぞれがマラソン大会においてごみの散乱する問題、ごみ箱に捨てる意識について日頃から考えて取り組んでいたことではないでしょうか。これはアスリートクラブというランニングクラブが主催する札幌・支笏湖ウルトラチャレンジ70キロという大会です。この大会では、まさしくマイカップ持参を参加者に呼びかけています。いずれにしても、このマイカップ運動に対する賛否はあると思います。この取り組みは、競技者の負担にならない範囲でできることを呼びかけていくということが非常に重要なのではないかと考えております。大会の主催者としても、マラソン競技そのものに影響を出さないようにこの運動に取り組んでいきたいと思っております。

さて、中止になった第2回大会でも事前にマイカップ運動の準備は行われてきました。その内容について牧野からお話します。

(牧野) 今後に向けてということで検討・計画していたことをお話しします。マイカップ専用給水所の様子を見ていますと5キロメートル地点などは列ができていました。少しでも、タイムロス無くするために5キロメートル地点は給水担当ボランティアを増やすとか、テーブルを増やすなどの対応をすべきかもしれません。また、マイカップ利用者が増えた場合、対応できるのかとの観点からの適正なマイカップ専用給水所の設置を検討していたところです。ごみ箱は、結構大きなものを設置したのですが、もっと大きくてもよさそうで、高さもあったほうがいいのかもかもしれません。これも再検討していたところです。

携帯しやすさ、飲みやすさなどの面からマイカップ給水に最適なグッズを新たに探しているところです。第1回大会は運営側、参加者側両方にとって初めての取り組みでしたので、グッズは中標津十二楽走が準備し、無料で配布しています。しかし、いつまでも無料配布なのかという考えもあります。このまま無料提供で行くのか、デポジットをとったレンタル制の導入も今回検討していました。理想は参加者が一番利用しやすいグッズを用意して、運営側が準備した専用給水所で給水すること。そこは参加者が自分で持ち帰って洗浄し、また他の大会で利用する。これが資源の消費などを考えても理想的ではないかと考えております。持参の呼びかけも今回検討しておりました。他のエコな取り組み、むだを無くす取り組みとしてマイ安全ピンの導入も検討していました。これが今年検討していたグッズです。両方ともシリコンでできたコップです。右が折りたためるコップで軽くて変形できるので飲みやすいものです。

これは先ほど話があった、ウルトラチャレンジで参加者の利用があったものです。マヨネーズのボトルをカットしてマイカップとして利用したものです。マイカップ、ボトルの利用自体がリサイクル、リユースですし、柔らかくて軽いので飲みやすく、携帯しやすいのではないだろうか。各自が持参するにはこれほどいいグッズはないのではないかと考えていて、こういう物も今後、なかしべつマラソンでも紹介していきたいと考えております。

次に、マイ安全ピン運動についてです。この写真はマラソン大会で受付してもらったナンバーカードですが、これを止める安全ピンは合計8個になります。安全ピンは、ほかに日常生活ではほとんど使われません。大会に出るたびに貯まっていくばかりです。この状況をどうにかしたいと、白糠町で行われているロードレースの大会で、今年マイ安全ピン運動を行っています。必要のない人は、受付で回収ボックスに返却するという呼びかけです。

呼びかけに対して、200個ほどの返却があったと聞いています。今は、プラスチックの製品も市販されています。これを使うとユニフォームに穴もあかないし、安全ピンのサビもつかない。ユニフォームも傷まないのだから参加者にとってもいいことだし、運営側にもいいことでもあり、ぜひ中標津でも取り組んでいきたいと考えております。

このように、次年度に向けた検討・準備をしていたところですが、自分たちの力ではどうにもならないという部分もあります。そこで、今日は3R関係の企業の方に安くて携帯しやすく、飲みやすいコップやボトルを作ってもらいたくないかと。また、参加者が停止しないで給水できる自動給水機を作ってくれないかなどの希望があります。この辺が運営側として苦勞するところなので、いいアイデアがあればよろしくお願ひしたいと思います。

最後にまとめです。1回このような運動を行っただけで、まだまだ検討すべき点も多いのですが、これからのマラソン大会のあり方を考えるきっかけを作ることができたのではないかと考えております。今回の発表をきっかけに3R推進の趣旨を理解して、マラソン大会においても取り組めることを考えていきたいと考えております。

ランニングがブームから文化へと変わり、持続的にマラソン大会が開催されていくことを願ひ、運動を発展・継続させていきたいと考えております。

第3回大会は2011年7月開催予定です。魅力ある大会を目指して準備中なので、皆さんぜひご参加ください。今回の事例発表を行うに当たり、写真提供等々いろいろな方から協力をいただいております。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。



トークセッション

『マイボトル・マイカップが 使いやすい社会づくり』

コーディネーター

(有)ボイスオブサッポロ 代表取締役 橋本 登代子氏

パネラー

ペオ・エクベリ氏 (環境コンサルタント・エコライフスタイルアドバイザー)

篠 健司氏 (パタゴニア日本支社 環境担当)

蟻戸昭智氏 (なかしべつ330°開陽台マラソン実行委員会事務局)

牧野 司氏 (なかしべつ330°開陽台マラソン実行委員会事務局)



橋本：



それでは「マイボトル・マイカップが使いやすい社会づくり」をテーマにトークセッションを始めます。改めてトークセッションの皆様方をご紹介します。3

Rトークの講師、環境コンサルタント・エコライフスタイルアドバイザー、ペオ・エクベリ様です。事例発表者のパタゴニア日本支社 環境担当の篠健司様です。同じく事例発表者のなかしべつ330°開陽台マラソン実行委員会事務局の蟻戸昭智様と牧野司様です。よろしくお願いいたします。マイボトル・マイカップは5年後、10年後には普通のことになってもっともっと輪が広がっているでしょうね。

ペオ： 将来は考えずに多くの人がマイボトル・マイカップを持ち歩くとか。何も考えずにそのような便利な社会になれば一番いいと思います。それが本当のエコだと思います。

橋本： そのための地道な活動の1つですので、皆さん時代を先取りと言うことですのでご参加ください。テーブルにそれぞれマイボトル、タンブラーを用意いたしました。タンブラーを紹介していただけますか。会場で無料プレゼントされているものです。

ペオ： いいきっかけづくりですね。

橋本： マイタンブラーも増えているのでしょうか。

ペオ： 少しずつ増えていると思います。東京では大学生の間で増えています。私は大学で環境を教えているのですが、授業中は飲み物を禁止しています。エコな飲み物以外はです。つまりマイタンブラーならいいのです。今は当たり前になっています。



橋本： 皆さんもご自分のをお持ちですが、牧野さんご紹介ください。

牧野： マラソン大会で配ったのと同じものです。スポーツドリンクの小さいペットボトルにリングをつけて自分用にしたものです。リサイクルです。

ペオ： マジックテープですか。

牧野： そうです。手の大きさに合わせてあります。テープはこのリングで固定しています。

ペオ： 走りながらでも使えるのですね。

牧野： そうです。給水できます。

橋本： 持って走りにくい事はないのですか。

牧野： 手に握れますので気になりません。

橋本： 篠さんのは立派なものですね。

篠： 私もランニングをするのでそれ用に使っているものです。500ミリリットルくらい入ります。普段の練習や大会でも十分補

給の役に立ちます。携帯電話や小銭なども入れることができます。

ペオ： ジッパーがついていますね。

篠： もっと大量の水を持ち歩きたいという人は、いわゆるバックパックに入れてチューブで飲む人も増えています。そういうことでペットボトルの飲み物を買わなくてもいいように自分で持ち歩きます。



ペオ： それはいい考えですね。

篠： ランニングばかりでなく、登山でも最近使う人が増えていると思います。

橋本： エクベリさんのはどうでしょう。

ペオ： 私のはスターバックスで売っているものです。国内や海外の出張の時でも便利に使えます。ワゴン販売のコーヒーなども入れてもらいます。私にとっては持ちやすく大きさもちょうどよくて使いやすいです。温かいものでも冷たいものでも両方に使えるのです。自分にとって何がいいかがキーワードになると思います。無理やり使いなさいではなくて、自分が愛情を感じるものを見つけると使いやすくなるし、持続可能な行動になりますね。

橋本： 私のは100円ショップで買ったマイボトルです。水を入れるところが広がっています。水と氷を入れることができます。それぞれ愛着があり使い方も広がるのでしょうね。篠さんは企業が取り組むマイボトル・マイカップということで、本社では30年前から取り組んでいたのですね。

篠： アウトドアスポーツの製品を扱っている会社の社員ですので、元々社内で社員食堂の紙コップの代わりに各自が自分のボトルを使うようになり、来社されるお客様にもそのようなもので提供するようになったのがきっかけです。まずは自分たちが出しているごみを何とか少なくするために始めた取り組みです。

ペオ： 素晴らしいと思います。本当に有言実行と思います。

橋本： 企業理念が素晴らしいもので、取り組みやすかったのでしょうか。

篠： 言われるとおりですね。

橋本： 他の企業でも参考にしたいという場合、スタートとして何が一番難しいでしょうか。

篠： あとは有言実行だと思うのですが、先ほどのエクベリさんの説明で気が付かれたと思いますが、ペットボトルやレジ袋を使い捨てにすることはどういうことなのかをまず知ることが大事でしょうね。現状を知らないで正しいアクションに移れないと思います。そういう意識のある人が社内で広めてグリーンチームみたいなものを作ってやっていくことがいいでしょうし、経営者がやりなさいと言うよりは社員からやりましょうとなっていったほうが動きとしては多分広がりやすいのかなと思います。

橋本： 広がっていく経過でのハードル、ネックは何でしょうか。

篠： やはりイメージとかデザインとか、利便さなどその辺でしょうね。本当にグッドライフと思ってもらうようになれば一番いいのではないのでしょうか。

橋本： パタゴニア社では割と楽にできたのですね。

篠： まあ、何も障害はなかったと思います。

橋本： どうなのでしょう。他の企業の社員が1人でも多くマイボトル、マイタンブラーを持つとしたらどういうところを一番強調すると広がるでしょうか。

ペオ： やはり篠さんが言われたように利便さでしょうね。だから使い捨ての物よりもマイボトルを使うほうが便利な社会を作らないといけないのです。今、どうして私たちは使い捨ての物を使うのでしょうか。便利ですからね。マラソンでもたくさんの使い捨てのコップだらけでびっくりしました。走りながら捨てるのに便利なんです。だからそれより便利になるマイボトルを使おうということが大事だと思います。

あとは会社として考えればPRのチャンスではないですかね。社員にプレゼンターとしてマイボトル、マイタンブラーを渡して、そこに会社名を入れてランチに持っていくと、これはパナソニックさん、これは

ソニーさん、パタゴニアさんとPRになります。

橋本： さっき講演で言われていた、自分のボトル、タンブラーだったら味が良くなる、美味しくなるというのは。

ペオ： より美味しくなるかどうかは個人の感じ方ですが、少なくとも悪くはなりませんよね。便利さを失わず美味しい味になりますね。

篠： 私も水道の水を入れて持ち歩くことができるのですが、ボトルとは別に粉末状のお茶を持って歩いています。それも有機栽培のお茶です。水でなくてお茶を飲みたい時はその粉を入れるとお茶になりますので、そういうことで味というところでは、水道水でもミネラルウォーターと変わらないレベルの水ができていますので、その辺も見直していいのかなと思います。

橋本： そうですね。蟻戸さんはパタゴニア社の取り組みをどのように見ておられますか。

蟻戸： やはり会社としてそういった取り組みが確立されているというか、それを実行してきているところは素晴らしい。マラソン大会に代えてみますと、やれる範囲からやらないと無理してやっても長く続かないと思います。長く続けるためには出来ることからやっていくことから取り組みましたので、無理をしないで皆さんもやれるところからやっていただきたいと思います。



ペオ： そこは本当にチャンスだと思います。マラソン、アウトドアスポーツが好きな人たちはたくさんいますので、楽しみながらやると意外に広げるチャンスだと思います。無理にではなくてですね。

橋本： 実際に牧野さん、ランナーとして、実行委員会としてやってみてこの取り組みは正直どう思われますか。

牧野： ランナーとしては私も記録を追求して走っているほうなので、一方でそのようなマイカップを持って給水してもらうのはタイムロスになります。だからそういうラン

ナーを私たちは否定するつもりはありません。けれどタイムロスが気にならない人はこういう物を利用して走るという方法もありますよという提案だと思のです。エクベリさんの話にもありましたように、便利さを失わないこととか、ご褒美というのがあると思うのですが、やはり記録追求の人にこれを説明すると便利さが損なわれてしまいますよね。だからその辺はマラソン大会にこれが絶対にいいというわけではなくて、そういう競技性もありますから、両方で進んでいってうまいこと大会が運営できたらと思います。

橋本： このような取り組みは運営側と参加する側のギャップと言いますか、隙間を埋めるのは難しいでしょうね。

蟻戸： 参加者に呼びかけて取り組んでもらうのと、100%我々がこうしてもらいたいというのは人も多いので、決してそうではないですし、人数の多い大会になればなるほど給水所での混雑も当然あるでしょうし、ごみ箱へ捨てるには距離もありますし、本当に運営者も自分たちのできる範囲で配慮しなければならないし、参加者も意識を持って取り組むと、何百メートルは持って走れるかもしれないし、徐々に思いが一致していくのかとは思っております。

橋本： 優勝した人も回収ボックスに入れていましたね。

牧野： スポンジを入れていましたね。だからそういうことをしても優勝できるのです。マイカップになるとちょっと厳しいですが、回収ボックスに入れる程度だったらちょっとした気持ちの持ち方でトップレベルの人でもできることです。



ペオ： トップレベルの人は許さないかもしれませんが、アマチュアの場合は回収ボックスを利用するとマイナス3秒のボーナスポイントが貰えるとか、キャンペーンとしては面白いかもしれませんね。楽しさも大事なかなと思っております。先ほどのボックスを見ていると、ちょっとはずした人もいました。長い距離を走っても入れるのに失敗しないボックスがあればいいなと思ました。長いボックスなどね。

蟻戸： ごみ箱とか箱物で考えるとどうしても物が限られているような感じがあるのですが、投げ捨てられる受け皿的な物を長く用意するというのは、今後の検討課題として考えていたことです。

橋本： 篠さんもランナーですが、中標津の取り組みについてどう思われますか。

篠： 非常にユニークというか先進的で、こうした大会が増えていくと、マラソンをやる方はいろいろな大会に出て、自分の目標を持ってやっていると思うので、ある大会でそれを経験すると他の大会でもやってくださいという意見を言う方も増えてくると思います。

私は山を走るマラソンをやりますが、そうした中でも大会によってはごみの問題ではありませんが、事前に植林活動をするとか、ボランティア活動をした人に優先的に出場権があるとか、いろいろな大会が出てきていますので、そのアスリートの方たちにもそういう環境について考えていただく機会になると思います。

橋本： 確実に広がっていますね。ペオさんの本に環境を考える行動はスポーツと似ている。何度も繰り返すことでその動作が自然になってきて上達するとあります。まさにそういうことではないでしょうか。

ペオ： 私はそのように思っております。いろいろなルールも決まっていますが、レジ袋を貰わないと決めていても、店の人がサービスですよと言えば負けてしまうこともあります。何度も何度も繰り返して貰わないようにする。スポーツの世界でも何度も繰り返し練習することで上達します。そして生活の一部になってしまいます。トレーニングすると走ることも結構楽になると思います。

橋本： まさに身近なところから3Rに参加できますね。ちょっとした意識の変化によってですね。

ペオ： その通りですね。3Rはとても重要なことです。

橋本： 会場の皆さんからも質問やご意見、感想を聞かせていただきたいと思います。

会場1： 本当にこれから資源を無駄にしない。地球環境汚さないために勉強になりました。

1人ひとりが環境を意識しなければごみばかりの国になってしまうと思います。将来、子供たちのためにも我々は今のうちにやらなければと、責任の重さを感じております。

会場2： 今年中止になったのはどういう理由ですか。

蟻戸： 宮崎県で発生した口蹄疫の影響です。中標津町は酪農業が基幹産業で、マラソン大会に全国から多くの人が来るということで、コースには牧草地帯も含まれますので、重大な影響を与えないためにやむなく中止となりました。

橋本： 来年7月はぜひ参加してください。

会場3： 今は自然の物を使うようにし、ごみを減らすように工夫しています。

ペオ： 素晴らしいですね。やはり自然の物を使うのは次の段階として、土に戻すこと、自然に戻すことができる。分解される素材でできたボトルやカップがあれば落ち葉と同じように土に戻ります。その栄養を利用して木や花がまた育ちます。この環境循環型社会の自然素材を作るのが本当の目的です。

橋本： スウェーデンでは地上と地下という考え方があっていいですね。

ペオ： それは自然から学んだことです。数百万、数千万の動植物はごみを捨てません。CO₂も出しません。彼等は資源として地上の循環だけ使っているのです。唯一、地下から取る石油を使うのは我々人間だけです。すべて地上に切り替える。自然素材を使うとCO₂もごみもなくなります。

橋本： 最後にこのイベントに参加されての感想と、こうした運動をより広げるにはどうしたらいいかをお伺いします。

牧野： 私たちのマラソン大会で取り組み始めたきっかけは完全にこの3Rの趣旨に基づいてのものではないのですが、今回この企画に参加して、改めて3Rの考え方を知り、このようなことも取り入れてマラソン大会をより良くしていきたいと思っております。

蟻戸： マイカップ、マイタンブラーを持たないでここに上がってしまいました。こうした物を皆で使おうという取り組みには今まであまり関心がありませんでした。マラソンを始めたことでこのような場にも出させていただきましたし、やはりきっかけですので、少しずつできるところからやっていきたいと思っております。大会の運営についても同じように皆さんの負担にならないようにやっていきたいと思っております。

篠： 私共はアウトドアのためのウェアを作っていますが、やはりその自然を守るということは当然やっていかねばならない義務と思っております。その中に衣服も含めて循環できる3Rの社会、仕組みを作っていくことにぜひ貢献したいと思っております。さらに4R、5R、リセール、リパーパスなどまだまだ最終的に廃棄されるまでに私たちができることがあるかと思っております。リペア、修理をして長く使うことも広げていくことで貢献できればと思っております。

ペオ： 今日、篠さんのお話をはじめ、マラソンの失敗、成功事例を聞いていろいろ学ぶことができました。本当にありがとうございます。とてもよかったですと思います。3Rは実行すれば意外に結果が出ます。篠さんのRにもう1つ追加したいのはリターンです。返す。結局私たちが使っている自然に返すことができるかどうか、そのRです。これを追加するとエコマジックが始まります。

橋本： エコマジックがキーワードですね。パネリストの皆さんありがとうございました。

事例発表③

『北海道エネルギーのECOチャレンジ
～マイボトル・プロジェクト～』

発表者:北海道エネルギー(株) 総合企画部 業務部
部長 菊地 健二 氏・販売企画課 竹川 玲奈 氏



(菊地) 皆さんこんにちは。北海道エネルギーの菊地です。本日は3R推進北海道大会にお招きいただきまして大変感謝しております。ありがとうございます。

弊社、北海道エネルギーはまだ設立3年目の新しい会社です。社名をご存じでない方が皆様の大半かと思っておりますので、ちょっと紹介させていただきます。

弊社は北海道の主要都市及び近隣の地域でガソリンスタンドを運営する会社です。環境問題とガソリンスタンド。なかなかキーワード的に結び付かないと思っておりますので弊社のことを簡単に説明します。弊社は会社設立時より新時代総合エネルギー企業を目指しております。つまり、これからの時代すべてのエネルギーを取り扱い、そのエネルギーをお客様に提供する企業を目指すということで取り組んでおります。

現在、新聞やテレビなどのメディアでは様々なエネルギーを利用した環境に優しい自動車が話題に取り上げられています。代表的なのはNGV、ナチュラル・ガス・ヴィークル。この辺でも最近走るようになりましたが、天然ガスで走る車です。次にEV、エレクトリック・ヴィークル。電気です。最後にFCVです。フュー・セル・ヴィークル、水素で走る燃料電池の自動車です。

自動車がどんなエネルギーで走るようになって、弊社としましてはそのエネルギーをどんどん提供していきたいと考えております。このように世の中では環境に優しい自動車の話題に集中していますが、まだまだ街中を走る車の全てが環境に優しい車ばかりではありません。当面、自動車を走らせるエネルギーはまだガソリンが主流であると考えております。

エネルギーには石油をはじめ石炭、ガス様々ありますが、北海道経済産業局のデータによると、全国の石油依存度というのは50%を切り、49%になっています。これは石油から違うエネルギーにどんどん転換されているという証拠です。それに比べて北海道はまだ石油への依存度が63%と、全国レベルよりも高くなっています。北

海道は東京など首都圏に比べて公共交通機関が思うように発達していない。まだまだ自動車に頼る生活が中心です。また、北国であるために暖房用の灯油や重油に頼っている現実があると思えます。

以上の通り、北海道はまだまだ石油を必要としており、それを安定供給することが私共、北海道エネルギーの責任と役割だと考えております。

皆さんご存じの通り、石油を燃焼させるとCO₂が排出されます。私共が直接このCO₂を排出するわけではありませんが、弊社から石油を買っていただいているお客様が乗っている自動車や石油ストーブからたくさんのCO₂が排出されます。そんなCO₂と密接な関係にある石油を販売する企業の責任として何かCO₂削減の取り組みができないかと考えておりました。弊社のコーポレートコピーは「もっと優しくもっと明日へ」です。私たちがこのコピーに秘めた思いは、人と車にもっと優しく、地域社会や環境に思いやりをもって、北海道の未来そして次世代エネルギーとともにもっと明日へ、大きくて安心して優しく明日を見つめる企業になりたい。何よりもお客様と地域にとって有益な企業でありたい。私たち北海道エネルギーが果たすべき責任、北海道の人々のために何ができるかということを探索していたところ、この3R活動にめぐり合うことができました。

その中でもマイボトル、マイカップの利用を促進し、ペットボトルを減らそうという取り組みは弊社の社員のみならず、私共のガソリンスタンドを利用していただく全てのお客様と一緒に取り組めるのではないかと考えました。出来ることから始めよう。この合言葉をもとにまだまだ規模は小さいですが、給水スポットとして弊社のガソリンスタンド5店舗に給水機を設置しました。また、マイボトルの利用促進を目的に、お客様に無料でプレゼントいたします。そのマイボトル・プロジェクトを始めました。この詳細については竹川が説明します。

(竹川) 北海道エネルギー環境推進担当の竹川です。大切な地球と未来のためにできることから始めよう。マイボトル・プロジェクトの目的はマイ

ボトル・マイカップを推進しよう。ペットボトルを使わないようにしましょう。その結果、CO₂を削減させようというものです。ではなぜCO₂削減のためにペットボトルを減らすのか簡単にご説明します。

ペットボトルの一生はまず原材料、原油です。その原材料を運ぶ船からCO₂が排出されます。次に製品化される製造工場で多くの機械を動かすためにCO₂が排出されます。そして商品化されたペットボトルは皆さんが買いに行くスーパーなどのお店に運ぶトラックからも排出されます。

ペットボトルの一生は飲み終わって最後ではありません。最後にはリサイクル工場で加工されるのですが、その工場の多くの機械からもCO₂が排出されるのです。普段はとても便利なペットボトルですが、たくさんのCO₂を排出するものなのです。

ではペットボトルがどれくらいCO₂を排出するか説明します。500ミリリットルのペットボトル1本から86.7グラムのCO₂が排出されると言われています。私たちが毎日1本ペットボトルを飲んだとすると1カ月で30本、CO₂に換算すると2.6キログラム、1年間では32キログラムになります。CO₂32キログラムは杉の木2.3本分が吸収するCO₂に相当します。

そこでペットボトルをなるべく使わず、繰り返し使えるマイボトルを推進しようということでマイボトル・プロジェクトを始めました。しかしマイボトル・プロジェクトを推進するに当たり私共北海道エネルギーだけではできないことに限りがあります。そうだ、北海道エネルギーにはたくさんのお客様がいらっしゃるんだ。お客様と一緒にマイボトル・プロジェクトを盛り上げていこうと考えました。

マイボトルの利用を促進するにはマイボトルカフェやスーパーの給水機のような飲み物を提供する場所が必要となります。当社のお客様が立ち寄りやすい場所、それは当社のガソリンスタンドです。それではガソリンスタンドに給水機を設置して給水スポットにしてしまおうということで環境省の実証実験に参加することとなり、札幌市内5店舗と本社ビルに合計6台の無料給水機を設置し、環境に関するアンケートを集めることとしました。それがマイボトル・プロジェクトの始まりです。

3R推進活動の取り組みでリユース、再利用の目的でペットボトル飲料を買わずにマイボトルを使っていただけるよう、ガソリンスタンドで簡単なアンケートにご協力いただいたお客様にオリジナルマイボトルをプレゼントいたしました。こちらがその様子です。そしてこちらがそのマイボトルです。

次にリデュース、発生抑制を目的としてマイボ

トルを積極的に使っていただけるように弊社はガソリンスタンドに給水スポットとして無料給水機を設置しました。この設置に当たっては沢田建設様、寺岡精工様のご協力の下設置されました。給水機を設置した日から数日間、私共事務局もガソリンスタンドで一緒にお客様へアンケートのお願いをいたしました。快くアンケートにご協力いただけるお客様が多く、給水機の水もおいしいよ、また来るねと言っていただけるお客様もたくさんいらっしゃいました。

次にマイボトルを積極的に使うシーンとして北海道エネルギーはどのような立場で支援できるのか考えてみました。まず、1つ目にドライブに出かける時です。ドライブの前にガソリンを入れ、そのついでにマイボトルに水を入れて出かけることで途中ペットボトル飲料の使用を減らすことができると思います。また、外回りをしている営業マンが会社の車にガソリンを入れるついでに水を入れたり、もしくは水を入れるためだけにでもスタンドにお立ち寄りいただければ、マイボトルの利用頻度もますます上がるのではないのでしょうか。

給水機はたくさんのお客様の目につくよう、お店の入り口に近い位置に設置し、デザインは水をイメージしやすいものとししました。また、マイボトルを利用している方々の悩みとして外出先でマイボトルを洗う場所がないと聞いておりましたので、給水機の横に専用のミニシンクを設置し、いつでも洗えるようにしました。マイボトル・プロジェクトにおいてアンケートにご協力いただいたお客様は2,000名を超えました。つまり2,000個のマイボトルを受け取っていただいております。給水機を設置し約半月の利用状況を調べたところ、店舗により異なりますが1店舗1日20リットルから30リットルのご利用があります。人数換算すると40名から60名です。

ここで気になるアンケート結果ですがマイボトルは環境によいと思いますかの設問に対し、97%のお客様が環境に良いとお答えをいただいております。また、今後マイボトルを使っていきたいと考えますかとの質問に対し、93%のお客様がこれから使っていきたい、よいきっかけになったとお答えいただいております。これらのアンケート結果により、お客様の環境に対する意識の高さが分かりました。現在、給水機の利用状況は1日に20リットルから30リットルですが、お客様の意識が広がることにより1日50リットルのご利用を想定しております。50リットルはペットボトル100本分になります。それを1カ月に換算するとCO₂243キログラムは杉の木7本分が吸収するCO₂量に相当します。また、1年間に換算するとCO₂2,900キログラムは杉の木84本分が吸収するCO₂量に相当します。

事例発表④

『香露茶館の中国茶と
マイボトルサービス』

発表者:中国茶専門店「香露茶館」オーナー
田名部 康平 氏



(田名部) 皆さんの中で専門店で中国茶を飲まれた方はおいででしょうか。あまりおられないようです。では店舗の説明とお茶の説明、中国茶の専門店とはどんなところかをご紹介します。マイボトルサービスのお話をします。

私の店は札幌西区八軒にあります。店は喫茶、茶葉の販売とテイクアウト、茶器の販売、中国語も教えています。私の妻が中国人で、中国語と中国書法を教えています。8月に山の手から現在地に移転したのですが、山の手にいた頃、朝茶というサービスをやっていました。朝7時くらいからテイクアウトだけでしたが、出勤や散歩される方にサービスしていました。それをやっていた時に、店側として不満があったというか、欠点を感じていました。中国茶というのは、皆さんが思っている以上に量が出ます。どんな茶葉でもそうですが、少なくとも1リットル以上は必ず出ます。テイクアウトの紙コップはそんなに入りませんから、余ったものを捨てるか私たちが飲むか、サービスで出すかしかありません。

それをずっと悩んでいたのですが、ある時、象印さんから給茶スポットを始めるので参加しませんかという話がありました。これは地域に根づいている小さな喫茶店から始めようという試みです。例えばマイボトルを持っていく方は家からお茶やコーヒーを入れていくわけです。それを飲んでしまった後はどうするのか。どこで補充するのか。ペットボトルを買ってきて入れるのかという話になると思うのです。

それを地域に根づいている喫茶店で給茶ができたらいいなという話だったのです。それに早速乗ってそのサービスをすることにしました。特にうちは量が多いのです。そうすると、少しの量では心苦しかったので、できるだけ入れることにしました。例えば2リットルの水筒にでも出るだけのお茶を入れるようにしています。

給茶の実績、お客さんの利用度はどれくらいかという、大体利用者は限られてしまいます。マイボトルを持っていても、持ち歩かない人が多いです。なぜかと言いますと出かける時にわざわざ持つのは邪魔になるとか、入れるのが面倒だとい

ことです。いつもカバンに入れておくといいいのですが、それを持っていて、お茶を飲む時にそれを使うかという皆さんなかなか使わないそうです。

うちではそれを何とか使っていただけるようにサービスを考えていました。先ほどのペオさんが割引サービスの話をされましたが、うちでは100円割引にしています。それでちょっとお得感が出たほうが皆さん、使ってくれるかなと考えました。どうしても何か環境のために、エコのためにと構えてやるとなかなか利用が少ない。うちではマイボトルを持って来る人は1日平均多い時で5名くらい、少なければ1人くらいです。それはうちのサービスを説明してやっとそれくらいの数です。最初の頃は象印さんの給茶スポットの店のシールを見て質問する人に説明してもピンとこない人が多かったです。今やっと少しずつ皆さんが使うようになってきているので、せっかくです。どこかでもやってくれたらと思っております。

用意してありますので、ここで実際に入れてみたいと思います。店でやっているようにマイボトルへの給茶のやり方をお見せします。皆さんが持っているボトルに入れます。(給茶実演)中国茶にはいろいろありますが、大体皆さんが思い浮かべるのはペットボトルのウーロン茶だと思います。実は中国では緑茶の生産が最も多く、約80%は緑茶だと言われています。ウーロン茶も茶色の物がメインではなくて、緑茶に近い緑色の物が一般的に飲まれているウーロン茶です。今日はそれを入れてみます。ご家庭では普通の急須でいれてもかまいません。作法では一煎目は捨てます。このように茶玩具にかけて茶の色や香りを付けます。ウーロン茶は十二煎くらいとれます。

中国ではマイボトルはこのようなものが一般的です。太空杯と呼ばれるものです。茶漉がついています。これを持ち歩いて中国国内ではどこでもお湯を貰えますので、これに茶葉を入れるとお茶が飲めます。中国では特にエコという考え方ではなく、冷たい飲み物を飲む習慣がありませんので、温かいお茶を飲むためにこれを持っているのです。現在では若者はあまり持たなくなってきました

した。ペットボトルの冷たいウーロン茶も元々はなかったのですが、サントリーが逆輸入で売っています。

元々は健康にいいか悪いかでしたが、最近はペットボトルを捨てたりするようになってごみが増えているようです。そういうことを気にして行動することが日本でも中国で必要なことだと感じています。お茶は温かいほうが美味しく、香りもあります。特に冷え性の方は夏でも温かいものを飲むことをおすすめします。環境のためというどうしても仰々しくなってしまうのですが、昔の文化を見直すと体にいい事、美味しく食べたり飲んだりすることが自然と環境につながっています。便利さが欠けると推進していくのは難しいと思いますが、不便さを上回る美味しさがあるとまた違うのかと思いたいです。

私個人的にはマイボトルの利用はむしろかしいとは思いません。マイボトルで飲んで楽しいとか、美味しい、面白いと感じて利用いただければと思います。ぜひこの会場でプレゼントされたマイボトルを持って私の店へ来て美味しいお茶を楽しんでください。



トークセッション

『マイボトル・マイカップが 使いやすい社会づくり』

コーディネーター

(有)ボイスオブサッポロ 代表取締役 橋本 登代子氏

パネラー

ペオ・エクベリ氏 (環境コンサルタント・エコライフスタイルアドバイザー)

菊地健二氏 (北海道エネルギー(株)総合企画本部 業務部 部長)

小野隆則氏 (北海道エネルギー(株)総合企画本部 業務部 販売企画課 課長)

田名部康平氏 (中国茶専門店「香露茶館」オーナー)



橋本：



それでは3Rトーク、事例発表に出演していただいた皆さんによるトークセッションを開催いたします。テーマは「マイボトル・マイカップが使いやすい社会づくり」です。よろしくお願いいたします。

今日、この会場で北海道エネルギー社が無料でタンブラーを配布しています。どうやったら入手できるか教えていただきますか。

菊地： もうなくなったようですが、アンケートにご協力いただいた300人の方に配布いたしました。ありがとうございました。

橋本： その中に入っているお茶について田名部さん、紹介していただけますか。

田名部： 会場で私のところのスタッフが給茶サービスしています。中国茶です。

橋本： マイタンブラーというのはこれからのものですね。

ペオ： そうですね。少しずつ増えていますが、先ほど田名部さんが言われたようにまだピンと来ないのかもしれませんが、何のためにこれを使ったほうがいか、一度分かっってしまうと忘れないと思います。私は東京に住んでいますが、少しずつ広がっています。

橋本： おしゃれで、いろいろ工夫があるようですが。

小野： 弊社のオリジナルで、アンケートにお答えいただいたお客様にプレゼントしており、今後も配布を続けていきたいと思っております。300ミリリットルは入ります。弊社の給水スポット以外にも自分で好みの飲み物を入れたり、そういうサービスをしている店でどんどん使ってもらえればと思っております。



橋本： 無料給水スポットがあって、給茶スポットもできてきて、時代が変わったことを感じましたね。第1部のトークセッションではオフィスや企業から見たマイボトル・マイカップが使いやすい社会についてお話いただきましたが、今回は取り組みを進めていくための支援、サービスとしての立場からのお話を展開してまいります。そう言うとなんとなく固いイメージがありますが、そうではなくて給水スポットや給茶スポットが増えていることを、どう自分たちの生活の中で使うかというお話です。まず、ペオさんから事例発表を聞かれての感想からお願いします。

ペオ： 北海道エネルギーさんのお話は大変良かったと感じています。「エコ偏見」という言葉があります。プラスチックのペットボトルを使わないことで、CO₂削減につながるわけですが、それではビジネスにつながらないというエコ偏見があります。今日、北海道エネルギーが小さなステップながらも証明したのは、そうではなくて会社

として化石燃料が減っても新しいビジネスが表れることです。素晴らしいです。一步を踏み出すと面白いことが表れます。

中国茶の場合、中国で昔からマイボトルの習慣があるのは知りませんでした。面白いと思いました。もっとも中国ではエコという意識ではないようですが、どんどん化石燃料を使わない社会になりつつありますね。ソーラーや風力も非常に増えていますね。

橋本： 北海道エネルギーさんの無料給水システムというのは始めて1カ月ほどですね。お客様の声はどうか。

菊地： 始めたばかりで広めようという努力をしております。その活動がこのタンブラーをできるだけ手にしてもらおうということで声をかけています。まだまだ数は少ないで



す。使っているお客様からは、タンブラーよりも水がおいしいということを言われます。アンケートでもよいきっかけになったと言われる方が多いです。

橋本： この会場でも初めて知ったという方が多いようですね。私自身もこのイベントで初めて知りました。少しずつ広めていくことが大事ですね。最終的にはどのように進むのですか。

菊地： 現在5カ所で実証実験の形で進めています。ドライブのお客様が多いセルフの店が南区のチャレンジ川沿、厚別区のチャレンジ新札幌、手稲区のチャレンジ手稲インターの3カ所と、あとは企業の営業マンの多い中央区の南4条、白石区米里の2カ所です。

橋本： ここでどういった展開がされると理想的でしょうか。

菊地： 当然、我々が広げていかなければならないという使命感はあります。それよりも皆さんのほうからどんどん増やしてほしいという声が寄せられるとやりやすいかと思っております。

ペオ： アンケート結果で93%がマイボトルを

続けたいと答えているのには驚きました。そこまでなってきたのですね。チャンスですね。

橋本： 北海道エネルギーさんは給水が仕事ではなく、石油が仕事なんですよ。

菊地： CO₂を排出する石油という商品を販売する会社の責任としましてCO₂削減に取り組む一環として3R活動を推進していこうと、会社として社会に貢献できるのではないかとこの考えの下、今回のような活動が始まりましたので、これをきっかけに我々ができることは小さいのでお客様や地域の皆様に裾野が広がっていくと、活動が大きなものになると思っております。

橋本： イメージ作りを越えたところにあるのですね。

菊地： そうですね。

ペオ： 面白いと思いますよ。北海道エネルギーが「エネルギーを売る会社」と紹介していますが、そこですよ。私も何が欲しいのかを問いかけました。容器なのか飲み物なのかと。世界中のエネルギー会社は石油を売りたいか、エネルギーを売りたいか。最終的には儲けるのであればエネルギーです。そこはチャンスだと思います。

橋本： 給水スポットをもっと増やすとなると給水機も増設しなければなりませんね。その費用はどこからでるのですか。

菊地： お客様から、「これはいつから有料になるのですか」と聞かれることがあります。今だけ無料なのかということです。私たちはこの3R活動を営利とは考えていません。私たちの責任として給水スポットを増やす、マイボトルをお勧めする。ただしマイボトルはかなりの費用がかかるので、無料プレゼントには限りがあります。

ペオ： 結局、会社の投資ですよ。会社としては社会的責任を果たす。私たちの目には素晴らしい活動と映ります。

橋本： 私たちはつい採算のことを考えてしまうのですが。

菊地： 費用対効果はお客様のエコ意識が高まることだと思っております。

ペオ： そうでなければ始められないと思います。

橋本： 給水機というのはいろいろなタイプがあるのですか。

菊地： ガソリンスタンドに置けるものは今の寺岡精工さんのタイプだけだと思います。

ペオ： そこで中国茶を出すといいかもしれません。何かコネクションがありそうですね。

田名部： お湯が出るのであれば、茶葉が入られるこのボトルを持っていくとお茶が飲めます。

小野： お湯についてはまだ安全上の配慮などいろいろありまして、現在は水だけの提供になっています。機械が今後改善され、安全対策もされるとお湯も供給できるようになると思います。

ペオ： 田名部さんのやり方では「どこでもカフェ」が実現できますね。素晴らしい考え方ですね。

橋本： 田名部さんのサービス店舗としての考えですが、現在は札幌市内に5店舗ですか。

田名部： 象印さんの給茶スポットに加盟している小さな喫茶店ですね。大きなところだと大抵入れてくれます。近くの喫茶店で入れられると一番いいのです。そこでペットボトルではなく、普通のお茶やコーヒーを飲んでもらうとありがたいわけです。あとはボトルを出すことを恥ずかしがらずにやることです。出して当たり前という風潮になるといいですね。



橋本： エコバッグも以前はそうでしたが、時代が変わりましたね。

田名部： お茶も前はご家族連れのお客が多かったのですが、今は通勤のサラリーマンの方が普通に持ってくるので、少しずつは変わってきていると感じています。

橋本： 女性の目から見ると、給茶でマイボトルを出す男性がいたら素敵だと思います。意識が高いと思いますね。これからは性別や年齢に関係なく、普通の行動になってくるといいですね。

田名部： 若い方や外で働いている人は目にする機会も増えると思います。ただ、年齢の高い方には定着しないのかなとは感じています。今はお客様から他の給茶スポットの情報を聞くこともあります。

橋本： これから広げるにはどのようにしたらよいいと思いますか。

田名部： 一番は使い勝手がいいことだと思うのです。例えば北海道エネルギーさんでボトルをいただいて、使うスポットが多いと増えるでしょうね。使える情報を告知していくことも必要ですね。

ペオ： 田名部さんが先ほど、ピンとこないというひとを言われましたが、かつてはスウェーデンでも、スーパーなどでエコ商品が売れない時代がありました。オーガニック商品などもです。そこで分かったのは売り場の位置も店の奥のほうで良くなかったし、どうしてエコ商品を買わなければいけないのか、選ばないといけないのか、なぜ賢い商品なのかという説明も一切なかったですね。ところが店の一番目立つ所に置いて、大きな看板で説明するようになると、つまり動植物の保護のためなどの説明があると関心が高まったのです。目的をはっきりと訴えるとピンとくると思います。



橋本： スウェーデンでは店側が積極的にやったのでしょうか。それとも消費者側のニーズに高まりがあったのでしょうか。

ペオ： もちろん消費者の側からです。消費者の意識の変化です。エコの商品のない店には行かない。そういう商品を置いたら行くようにしますと。批判プラス提案ですね。批判で終わってはいけません。例えばエネルギー会社で化石燃料を扱うことへの批判はあると思いますが、どうすればいいのかという提案も大事なのです。

北海道エネルギー社はまず小さな入り口を作りましたね。マイボトルは小さなことですが、シンボリックには非常に大きいことです。そこを私はほめたいですね。

橋本： スウェーデンの給水とか給茶の状況とい

うのはどのようですか。

ペオ： 給水よりもいろいろな商品の量り売りがあります。スウィーツファクトリーの量り売りを世界で最初に導入したのがスウェーデンです。それからお茶、コーヒーなども量り売り、ばら売りがあります。日本でも少しずつ無印商品などでこのやり方を広げていますね。スウェーデンでは商品の価格の10%は包装の費用という調査結果があります。それを減らすと商品も当然安くなるはずで、会社としては買うお客が増えるし、客も満足する。一石三鳥くらいになりますね。

橋本： 飲料もペットボトルが無ければ安くなるかもしれませんね。今は給水スポットが少ないのでやむなくペットボトルの中身をマイボトルに移していますが。

田名部： 私の所では100円引にしていますし、茶葉を量り売りにしています。ジップ付きの袋に入れて売っていますが、またその袋を持って来ると10%引にしています。

ペオ： 私のこれまでの経験では、50円引がこれまでの最高でしたが、100円引は世界記録です。

橋本： 昔はお豆腐を買うのに入れ物を持っていきましたが、ああいうのでも構わないのでしょうかね。

田名部： そうですね。私の店でも自分の入れ物を持って来る人がいます。店に何枚も袋を使わせるのは悪いし、値引きしなくてもいいから自分の袋にという気づかいです。

ペオ： フランスではフランスパンを包装なしで買うのが普通ですよ。かっこのよさもありますね。日本で同じようにネギを持って歩くとかっこ悪いと言われます。何が違うのでしょうかね。

橋本： ところでスウェーデンでは古着の回収スポットがあり、何キロメートル食べたかと言う会話があるということと、小さい頃から環境教育が行われていると聞きますが、どのようなことなのでしょう。

ペオ： 先ほど紹介しました粗大ゴミのためのリサイクルセンターと有害ごみの環境ステーションがあります。有害ごみには化学物質

を含む化粧品なども対象です。そこで古着も回収します。化学物質を含む衣類も有害ごみです。ですから、オーガニック素材の衣類を意識するようになります。私も今日は服も、ジーンズも靴もオーガニックです。そのまま土に返すことができる素材です。普通Tシャツ1枚、ジーンズ1本に普通は3キログラムほどの殺虫剤が使われているそうです。また、それを運んだりすることでもCO₂が出ます。

環境教育ではエネルギーについて必ず学びます。小学生が最初に学ぶのは食べ物からです。食べることは元気の出だし、食物や捨てられる物に残るエネルギーのことも学びます。首都ストックホルムでは、すでに25%のCO₂削減を実現しています。市内を走るバスのすべては化石燃料を使っていません。バナナの皮やパンくずなどからバイオガスを作って走っています。いずれも地上のガスです。地下の燃料から切り替えてCO₂がゼロになりました。5キロの生ごみがあると1リットルのバイオガスを作ることができるのです。システムは天然ガスと同じですから、今がチャンスです。この中の飲食店の生ごみを集めてバイオガスを作ることができます。ごみではなくて資源ですね。7000キロも離れている中東から石油を運ぶよりも、70メートル先の店から出るエネルギーを使う。そうしたことをスウェーデンの学校では教えています。天ぷら油でもお茶の葉でも車は走ります。

給水スポットが広がると、このようなエネルギーも収集しやすくなります。インフラ整備になりますからね。だから北海道エネルギーさんの小さな取り組みは大切な始まりだと思います。期待します。食べ物と距離のことですが、遠くから運ばれる交通食物ではなく近くでできた物を食べようということです。できるだけ近くの物を食べる。今日も中国茶を飲みましたが、ヨーロッパのお茶よりは近いことになります。

橋本： マイボトル・マイカップの話からどんどん広がって、3Rは奥が深いなと感じました。では最後に3Rステージを意識して、本日の活動にどのような感想をお持ちになったか、また、今後の展望や計画などもお伺いしたいと思います。

菊地： この取り組みを始めるに当たりまして、勇気を必要としました。勇気がなければ初めの一步は踏み出せなかったです。

我々のやっていることは本当に小さなことです。今日、よかったなと思ったのは給水スポットという言葉聞いた人がより多くいたことです。我々が始めた1カ月前は給水スポットと染めたノボリを立てても、その言葉を知っている人が少ないのであまり効果があるとは思いませんでした。しかし、今日はその言葉を多くの人に聞いていただき、今後スポットを広げていく上で力になりました。

小野： ペオさんが言われた有言実行という言葉の大切さを感じました。今日の3R大会をきっかけにマイボトルの使用をどんどん広げていただきたいと思います。当社の給水スポットではどんなボトルでも結構ですのでご利用ください。空になったペットボトルをもう1回使っての給水でも新しく買うよりは3Rの活動につながると思います。小さい一歩を広げる有言実行をやっていけば確かなものになると感じました。

田名部： お茶やコーヒーは嗜好品なので、楽しんで飲むものですよね。そこからやっていると、私のような小さい店でももっとやれることがあるのではないかと考えさせられることがありました。使った茶葉の使い道も考えてみます。

橋本： 会場の皆さんにも感想を伺いましょう。

会場1： 目的はペットボトルを減らすことですね。でも、それを作る大企業は多く売りたいでしょうからコストを下げてもっと大量に作ることを考えるのではないかと思います。その辺の整合性はどうか疑問です。

ペオ： 再利用のボトルも考えられます。かつてのビールびんの再利用と同じように、1本のペットボトルを20回使うのもすごいビジネスになると思います。そこのパラダイムシフトは必要だと思います。スウェーデンではCO₂削減を達成して、かつ経済も成長させました。さらに2050年までに100%削減する目標を立てています。1人当たりゼロにする目標です。日本でもいつかはしなければなりません日本にはその技術や知恵があります。鳩山さんが25%という高い数字を出したのは評価します。

会場2： 今日目はからうろこのような話が多かったですと思います。北海道エネルギーさんが言われた出来ることからという言葉は皆の頭

に残ると思います。それと自分たちの力は小さいけれど、参加する人が増えると大きな力になるというのが分かりやすかったです。3R活動もインフラが整備されると便利だと思います。北海道エネルギーの全道のネットワークを利用すると我々の行動も変わるという気がしました。

菊地： 聞いていただき感謝しています。

会場3： できることから始めようと思いました。

橋本： ペオさんにまとめをお願いします。

ペオ： 私は25年間環境問題に携わっています。環境問題の解決は希望を与える仕事だと思っています。私の教えている大学の若者たちの中には、大人たちが希望を壊してしまったと思っている者もいるようにも見えます。けれど私は、大丈夫、解決できるよと言っています。日本で希望を提供できるのは北海道ではないかと思っています。

北海道で農業や畜産の廃棄物を利用して新しいエネルギー、バイオガスなどに切り替えるお手伝いをしたいと思っています。だからこの北海道に希望を感じています。

橋本： 皆さんありがとうございました。



閉会挨拶

本日はお休みの中、お忙しい中ご参加いただきありがとうございます。今回の大会では市民、事業者、行政が参加し、3Rのうちリサイクルのみならずリデュース、リユースについての取り組みを広げるとともに、特に本年度はリユースのうち、マイボトル・マイカップをメインテーマに開催しました。今日の講演、トーク、講座ではそれぞれの講師の方々からライフスタイルを考えさせてもらえる大変参考になるお話をお聞きすることができ、大変勉強になったと思っております。

本日の大会を盛り上げていただきました講師の皆様、長時間にわたりましてどうもありがとうございました。これを機会に私共事務所としましても3Rのうちリサイクルのみならず、リデュース、リユースについての取り組み、各種普及啓発事業のさらなる展開を行い、循環型社会形成の推進を図っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

会場の皆さん、環境に負荷をかけないように、誰もが簡単に実践できるリデュース、リユースの具体的な取り組みとして従来から進めてきましたマイバッグに加え、さらにマイボトル・マイカップの利用を自ら実行し、エコなライフスタイルを広めようではありませんか。本日はどうもありがとうございました。



環境省 北海道地方環境事務所
統括環境保全企画官

伊藤 孝男



平成22年12月

環境省 北海道地方環境事務所 環境対策課

〒060-0808

札幌市北区北8条西2丁目 札幌第1合同庁舎

TEL 011-299-1952

FAX 011-736-1234

委託機関 (株)セレスポ 札幌支店

〒003-0809

札幌市白石区菊水9条西3丁目5-13

TEL 011-821-1810

FAX 011-821-1811

本事業は、環境省北海道地方環境事務所の委託により実施したものです。【禁無断転載】

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料[Aランク]のみを用いて作製しています。